

特41

127

館書圖京東

函七二 門新

架三 部立

號 類立

滑稽音演說會

全三冊

東京朝日新聞

特41 定127 免送遞租

總生 實編 輯

滑稽演說會

第二十六卷

目 錄

毎月五日二十日發兌

○我が日本と世界第一の強國とすべし大演說
○開化人の演說

明治十二年八月廿日發兌

竹久堂

總生 滑稽演說會第廿六卷

○我大日本を世界第一の強國とすべき大演說の續き
長々しい哉御退屈ある哉馬鹿々々しい哉あきれ返る哉際
限を知らざる哉宜い加減の切り揚げを辨ひさる哉此題就
に掲げ出した大日本を世界第一の強國にする演說はどん
おに長くとも是迄の例に壹冊で書き盡せぬい事のぬいの
を貳冊迄書き立てもうく倦々した生意氣に利屈らしい事
と並べてこんち石部流なものを見る位なら文明開化英雄
豪傑の頭合せをする世の中學者も才子も辨で量り笑で簸
り出で程ある廟堂の君子新陳各社の社説素人衆の投書演
說會の諸先生有志の人の論辨名僧智識の引導説法とつち
へ向ても教えさかり聞せたがり論したがる人ばかり兎角

滑稽演說會第廿六卷

先生と御師匠さんが多くて生徒が少さい時節其日の講釋
は席費と要せずの縦覽と許そだの聴聞勝手次第だの或
は湯物を出すの茶を飲ませるの剛飯と呉れるの饅頭を配
るの歸りの土産を引き物にして購へ附けるの別品を取り
持つ金の貸すの親類付き合ひと仕様の居残りによりて
呉れぬいかの氣老坂の提燈持ちをさる氣はぬいか征韓黨
の風呂敷背負ひとする了簡はぬいかと色々様々手を盡し
上手を道て人を引張り込む小利屈のせり賣り物敷寄世間
騒がし人氣激唆の流行る中だか竹天子なんぞの様も無
暗滅法界な出鱈目論を聞くに五錢の金貨を失ふは豈殘念
至極の紀頂と謂はざるべけんや豈必外と謂はざるべけん
や豈べし棒らしからずやと歎息せざるべけんやと返すが

へすもは愁傷の思召に相成り玉ふはは尤の至に存ト奉り
私に於ても誠に早は氣の毒に存ト上げ升るで座り升が
我國が弱けりやア外國に馬鹿にされる外國に馬鹿にされ
れば腹が立つ腹が立つ計りあら宜が無理と言はれて損と
また上に耻とかく耻とかく計りなら宜が貧乏して飯が食
ひあくある飯が食ひあくなる計りなら宜が親が子の肉を
食ひ子が親の骨と咬る夫が女房と女郎に賣る女房が夫の
寐頭とかく倒ぶものを突き倒す弱いものを張り倒す死ぬ
もの、喉をのどといふ様に無慈悲不義理殘忍無頼禽獸世
界畜生の世の中人非人外ソソクソソク困り入谷の鬼子母
神だのせうも仕方内藤新宿八ッ房の蕃椒だのオヤク
うですかだのと洒落も出ず地口も言はれず流行歌も奴鳴

洋利道員會 第二十六號

れぬい時節到來また日にやア自由權所か総さんの給金も
當てにあらす猫さんの祝儀も狐連の無心金も狸仲間の
大り銀も取れぬいから氣樂ふ事所か道徳も仁義も忠孝も
敵える隙も勤る時もぬい故に先づ面々安樂の源は我國の
兵力を強くするが第一番といふ譯は石瓦の降る中で碁將
棋をしてゐるもあらす夫婦喧嘩をしてゐる家へ行て晝眠
をするも出來ず今引操り返る船の中で何箇と握て遊ぶも
出來ず虎列刺病正札附きの家へ下宿して土用中の休暇と
するもあらす取崩す家に住む鼠嫁入りの騒ぎもならず獵
師の筒先に在る鶴子供に縛られた龜千年万年の壽命と請
け合ひ難し天下泰平國土安穩あればせんあ儉吝坊でも分
らず屋の親方でも提燈と釣るし萬燈を附け出し矢臺の割

り各ひ錢をはづみ込て御祭りの仲間へ首を突き込み孔子
の様に世話好きな物數寄あ教えて倦ます學んで厭ひす死
して後止むと言はれた阿爺さんも沂の温泉へ權妻を連れ
て夏凌ぎに行くとか舞雩の河原へ納涼に出掛けて麥湯や
氷水の新造をひやかしかがら詩經の詩を鼻歌の代りにう
なり出す戦争で仕揚げの英雄豪傑南北亞米利加の争ひに
鬼と言ひれは格蘭士氏も藝妓の体古舞ひを見て涎と流す
日光道中の旅籠屋女の尻とつめり藤八拳を打つ氣にもあ
る様あもの外に患があれば内に心配苦勞が出来るから
いかある阿房でも古池や蛙飛び込むと發句俳諧茶の湯挿
花高砂や此浦船と親世法生の謠といふ段にも至るべから
せ去れば兵力を強くする之猪鹿の荒れ込まあい様に垣を

よく結ひ廻りして菜大根を作る年季を仕遂た後に禮奉公
 迄して暖簾を分けて貰ひ女房を持つと同時事面々安樂の
 垣根たる強兵論だから長さらしくも最一遍竹天子がハッ
 ライラの甲鉄崩し小男の翠丸搦毛虱の食ひ込込策病犬
 の向騰かぢり胡麻蠅の巾着捜しおいらんの小股すくひ痛
 けりや放せ流借金取りの呆れ法百發百中奇々妙々人の氣
 の附た事か附かない事か知らぬいが自分で前賢未發八
 方一白眼み遣らすふつたくり割合の宜い考えと思ひ附た
 其儘を又候擔ぎ出し升そかり馬鹿々々しさと笑しさと御
 こらえ恒久忍耐の万事成し遂げる基なりとさ張た處が仕
 方がないが是も災難の内と御諦らめ下され最う一度の御
 辛抱を願ひ升扱廿四の巻から廿五へかけて段々上り處

は朝鮮と取り支那を捲き魯西亞と握り歐羅巴に入り亞
 利加に渡り亞非利加は刷毛序に撫で附る下り作りの撲
 取らだが支那は弱しと雖も追の大國張飛も出る項羽も出
 る吳子胥も出る樊噲も出る色々様々に腕先の強い人足が
 出た國だから今でも芥子坊主のチャンク天頭吹けば飛ぶ
 標あ奴計とも受け合ひ兼ねるから夫よりは最う一際手輕い
 所へ眼を附て見るに東印度諸島を手に入ることが第一の良策
 夫れ東印度の諸島は支那海及び印度の海岸と澳大利亞と
 の中に在る多くの島の總名で大体赤道下に位するが故に
 氣候炎熱草木繁茂して産物の多いことは世界無類の場所
 其中にも大きいのが婆羅蘇門多羅爪哇西里伯呂宋あとで
 諸島の人口總數は大約七千万大畧に和蘭の領地で本國か

ら爪哇に鎮臺と置き又其外の所に副鎮臺を置くが北の方
の諸島呂宋の様な所は西班牙の領地で葡萄牙の分は少許
あり又獨立してどゝの管轄にもあらかい所もあり又支那
人が爰に遷て住むものもあり産物は煙草砂糖咖啡木綿藍
青木材米穀生姜胡椒椰子油肉豆蔻丁子肉桂等種々の品が
出來て殊の外の好い土地其中一番大きい島が婆羅にて其
長さは三百廿餘里幅二百五十餘里其面積凡そ五方里世
界第一の大島だが開墾が届かあいかから人口は三百餘万計
り其次は蘇門答羅是は諸島の最も西に在りて一帶の海峡
を隔て印度の巫來由半島に對ひ長さは凡そ四百五十餘里
幅六十餘里其次は呂宋是は其六さは九千五百五十方里人
口六百餘万あり其次は爪哇長さは二百六十里幅二十五里よ

り五十里に至り人口三百餘万あり其中支那人十三万三千
餘亞拉比亞人三万二千歐羅巴人二万五千其他の皆土人に
して地球上に此位に宜い場所の澤山あい所其近さの臺灣
から海上纜に九十餘里で呂宋へ渡られる夫から婆羅夫か
ら爪哇蘇門多羅夫から摩刺加峽を渡りて巫來由の半島に渡
り夫から暹羅夫から安南是の後印度の地方で何れも獨立
の小國安南の人口六百万暹羅は三百餘万其隣が緬甸で人
口の八百万其中英領多し後印度の諸國の皆支那同様君
主專制の政治で國民自由と得ず其兵制の平時に至て少く
戦争が有れば國民と使役を何れも五六万の兵卒に過ぎ
ず至て弱い國だから東印度諸島を取ら後印度を取り夫
から人数を拵え兵糧が出來た上に支那の西南を取る頃

やア食ひ物も兵隊も我國の人の使ひねいて是迄に切り従へた外國人に働かせれば人の積押で角力を取る樂な軍をして南京北京朝鮮と次第々々に征め取るが最上飛び切り仕方西郷派が征韓論などい豊太閤が近世の打ち入り神功皇后が昔の御征伐等に基た今も昔も同ト様に心得て居る陳手も戦畧此東印度諸島から手に入る策と聽たあらばいつか廟堂で参議さん達の御仲間論が合はねいて國元へ引込み思案も成し遂げねいで荒暴れ出し熊本の一城に食ひ留められて立往生するかと思ふ間に川尻の尻責め鹿兒島の臺所潰しに後と取り切られて日向大隅の地方へ逃げ入たが持ち切をねいで城山の寂滅我國の爲めだといつて始めても双方の打死手負金を遣ひ家を焼き身内同士の戦

ひに國力を疲らした事と考えれば地獄の中に在て後悔千萬今更世間の人民に顔向けがあるまと思ふ位だから此策が竹天子器量限り魂限り米櫃の底を拂ひ錢箱の鍵と取り除け智慧の勅任官分別の大鯨思案の絹篩ひ強兵の元は軍の元の金は金銀金銀を遣ひば貧乏するのは常の習ひだが此仕方は左に非す始めは我内國の八と遣ひ金銀と張り込て軍の用意をして一島取れば其島の物を食ひ其島の人の遣て遣て其又先の島の取り其又先の島の人の遣て遣とあし手傳ひとして追々先へ出る時は分捕た金が百圓あれば五十圓と軍の入り用として跡の五十圓を内國へ送り込み貳十五圓と始め軍に出た兵士へ直に割り渡し拾貳圓五十錢を政府へ貯ひ置き拾貳圓五十錢と國に残て農工商

の業をしてゐる會計の本店さる人に割り附る様にすれば
 人々戦争の有るを悦び成る丈け軍の盡きないのと樂む様
 にあるから是迄取た土地で澤山だ其所で宜いと少し許の
 土地と安心して居る様な小さい了簡は出さあから軍に出
 た兵士勇み國を守て兵糧の手當とするもの悦び面々に張
 りと樂まが有るから軍に退屈といふものが來あい様にす
 るは欲の世の中金銀と澤山割り渡すが肝心要の軍の陣立
 は先づ九州へ大鎮臺を置き鹿兒島や長崎と埠頭として琉
 球を臺場とあし臺灣の南部野蠻未開誰の領分とも極らあ
 い所へ陣屋と立て造船の場所拵えといやア何と種に人の
 領地を取りに掛るかといふと彼の那波翁の敗軍後西洋諸
 國會盟して夫々の領地を極めたとはいふもの、元天地の

間は誰の所有と極た事のあいのが天地の正道を證據は彼
 の方かとも此方の領地へ手を出して樺太とこつちのもの
 だ千島はそつちの支配ぶ琉球は誰の物小笠原三宅八丈は
 何某の分と氷掛論を仕掛けられたつても詰り大國は小國
 を凌き強は弱を侮る段に至りては何所の國へ訟て此裁判
 と頼まうか仕方あしのづるくべつたり何は支那人が阿片
 が好きだからといつて苟も人間の身に大害の有るものな
 れば相互ひの事だから英國の方でも成る丈け賣り込まな
 い様にするのが信實の了簡だのに買ひ人と勤めて成丈け
 たんと賣り附るのと勝手に去たのは詰り支那から何とか
 言ひださせ言出しご時にやア夫を手掛りにして戦争を始
 め戦争と奇貨として人の國土と取る目論見とうとニコ玉

の償ひ金と香港の地を取られたのは支那の失策とはいひ
あがら其本と尋ねて見れば英國の有心故造されば後來我
國へも何ある事と言ひ掛け無理を通す手段をするか各
國の豺狼野心はどんな含みとして居るか先づ分らぬいと
極めて置く方が大事の上の大事取り間違無し蹴躓無しの
極印を打つ強兵の始め富國の仕掛りは先づ呂宋あたりか
ら始て婆羅爪哇其外の島々へ船と乗り込ませ割合れ宜い交
易を申せ入色彼と是と相談が出来れば又其上の割の宜い
事を談し込む夫が極れば又何とか彼とか葛藤の小口は交
易交際相手は阿蘭西班牙諸國人口纒か三四百萬我國の十
分一の手足らす連何程の事が有ても無くても手輕あ相手
は先づ其位あ所是強兵富國の基皇國の武威を世界に輝か

す旗揚げは頼朝が石橋山楠公が千早義貞が稲村が崎から
鎌倉の打ち入りや赤穂の血判本所松坂町の夜討の勢揃ひ
水戸浪人が東禪寺の切り込み掃部様の登城と覗て品川の
女郎屋で出立の酒盛だの東海道五十三次日本橋かゝ振り
出す町内の若い衆が御祭りの出し矢臺と引出その揃ひの
着物を拵えるの段トやアねい一骨折て樂にある代りには
右等の様あちよつとし譯トやアねいから是から先きは
いふべき事があつてもいふ程物數寄にもなるし生意氣に
も聞えるから先づ爰らで此一件は打ち留めとして此末の
事は御尋ねあらば申上べし先夫迄はチヨ。チヨ。チヨ。チヨ
ン幕になり升皆さん長々御厄介是から次ぎの題號は人間
一生世渡りの演説帝王の師たるものを求むべき演説都人

に大豪傑あき演説を始めとして世界一切地球諸の事々物々穴搜し顕微鏡の滑稽演説種は山々之有り候得共此巻は最早丁敷が澤山あいかから是迄言ひかけた開化不開化の言ひ立てを書き続け升二十三號以來久し振りで皆さんに御目見相替らす左の通り戯言の見世開き其爲口上左様

○開化人の演説(第二十三號の續) 植田 長四

道理も分らず分別も附か走小供同様あ心持で居るが少年寄り顔として幅と利かせ此間も文政度の舊弊親父が都々一に硝燈天頭と邪魔にはすれどおれが居にけりや内は暗

ぞの不識天明文化時只言末路徳川危近來乳臭無分別漫似赤鬚延黒髭だの何事も西洋宜いとカカブリと狂詩や川柳でへらす口學者といひは俳諧師占者村の金釘師匠繪と

いひの土佐家狩野家文晁抱一刷毛で山を染め川を引き景色といひば近江八景吉野山立田川安藝の宮島奥州の松島三保の松原清見寺二見が浦に浅間山伊勢に宇治橋内宮外宮相の山に杉に玉花鳥なれば梅に鶯薩摩芋に目白の鳥豆腐の殻に兎月に時鳥若松に鶴竹に雀菘に猪紅葉に鹿雨に乙島胡瓜に河童柳に五位鷲富士の山に鷹蒨子明の鴉に鐘撞き坊主人物あれば神功皇后の三韓征伐熊に金太郎曾我的五郎十郎頼光に酒香童子牛に乗た熊谷蓮生坊桃太郎の鬼島征伐權助夜這の圖加藤清正の虎狩り卒塔婆小町文覺上人が灘に掛る圖藤匠に藤娘鬼の念佛七福神恵比須大黒帝釋天觀音の像頼政が怪鳥を仕留る圖徳川家の御上洛役者の似顔弁慶五條の橋兒島高德の天句踐楠が正

行へ巻物を渡す處一休が獨體五百羅漢に關の地藏黃粉
 とふり時よりの小汚ねい彩色をしよ三福對の懸け物衝
 立二枚折り六枚屏風に主人不相識とか去國三巴遠とか夕
 立やとか夕暮にとか春雨にとか雪の巴とか宇治の茶處と
 か淀の車とか桐の雨とか茶の葉とか忍ぶ戀路とかわが物
 とかオ、イヤ親父のとかあめの夜にとか上手からとか
 サツサ参りまよ米山の藥師さんとか黄楊の横櫛伊達に
 いたさ、ぬとか或の唐詩選或の葉唄大津繪米山陳句尻取り
 都々一思ひくの事と書き散らして讚だとか語だとか録だ
 とか七ごととか恥を恥と思ひす苦勞を苦勞にまねい氣樂人
 世間が皆迂遠だから好も悪も知らぬいで是の何の先生
 様が書たの御寺の有難い坊さんが認めたのこの殿様の

筆だの門跡様だの公家衆だのと証事のねいものを珍重し
 て四疊半に引込み濁茶ど濃茶だ長板ど薄板だ障子の骨だ
 巨燧矢倉ど鉄火鉢も炭取りも爐縁も窓の瓢箪も葡萄棚も
 糸瓜の蔓も茶碗も菓子皿も麩取りも土瓶の蔓も茶釜も布
 巾も雑巾も皆物數奇悪好も是も只の物トやアねい東山義
 政公の手作り西行法師の笠の端杖の先き頼朝の頭巾の切
 れ富士の狩場の陣大鼓の皮道鏡の便瓶敦盛の笛袋お初の
 文箱静御前の舞扇忠信の鼓清元の三ツ柏常盤津の角草畜
 其外長唄の杵富本の櫻越中節の猿禪加藤節の片鎌槍土佐
 節薩摩節伊豆節房州節鉾子節程も役に立ねい物を并べて
 仲間と呼び同類を招き其品々を見せ開かして自慢顔見
 人も亦羨で是は十兩の價ありといひはイヤく百兩では安

い物ナカク、遠い四五百兩大丈夫時代は正しく保元平治少
し近くて元弘建武と鑿定を附ければ其目利き大違ひ是は
大化か白雉白鳳さ無くば神武天皇の時神代の昔天地開闢
の始めと口かふ出まかせ上臈と下臈のふつ附り放題
の動き次第互に評論衆議をして關屋の里三股川根岸の寮
向島の別莊道灌山目白目黒に目赤不動小石川傳通院下谷
の廣徳寺駒込の吉祥寺芝の愛宕山高輪の泉岳寺八ッ山
下兎角人家へ離れた閑静な所を撰て虫を聴くとか蚤と取
るとか欠びの稽古をするとか夢の判談をするとか鳩に豆
を遣るとか大飯の食ひ講をするとか女に惚れられる仕方
と研究するとか何にもあらねい贅隙之潰して天頭の兀る
のと待つ道樂者所々方々に寄り合ひを附け集會と催はし

碁と打さあけりやア將棋をさす双六をしあけりやア腕押
し手拭引き枕引き兎角ろくな事はしあひ先きの稽古長刀
の師匠柔術鎖鎌鎗やら棒やら其外武藝十八番の本元長い
刀を遣ふ流儀も小太刀の先生も面小手を當て胴を附けや
アトウ一本御面御胴參たか參らねいか居たか留守か利た
か利ねいかと腕一杯力限り親子も兄弟も見境ひなく大切
き魂の居る脳味噌の上面横腹の嫌ひなくボンク。ボンク叩
き散らし是が修行ご執心ぶと一生懸命の生兵法剛いもの
に出合ひたい敵討とする爲に親に間違があれは宜い軍は
出来ねいか何のエマくはねいか主人の家に傳奏響應の役
と申受けて高の師直騒ぎが有れば宜いとやたらに事と好
で大疵を受け一生涯支離ものどちり廢人となりて其家の

掛り人親兄弟の厄介ものどあるのは眞の泣き寄り木の實
は本へ落る道理で仕方がないが大名でも旗本でも貳人扶
持三兩の御家人でも皆門閥筋柄計りて其跡を續ぐから家
來は主の家を押領する算段主人は家來を泥棒同様に氣を
置いて油断のあらぬ此時節上げて宜ければ此政岡が上げ升
る今御館には悪人はびこり御近習小性膳番迄ちつども心
は許されず夫故に朝夕の御膳は皆庭へ捨させて此乳母が
手づから持えて差上るも若毒藥の巧もど六十四萬石の家
に生れて三度の飯に不自由する鶴千代君今あらば洋犬を
羨む御殿の場と川柳に言はれさう苦み位はまど疎加賀
騒動の大槻傳藏が手に掛けて一人あらず二人三人の殿様が
殺される災難は榮隆榮華も權柄も威光も壓制束縛して下

さるものを押え下士は中士に蟲の如くに見做され、は中
士は上士に糞の様に蹴なされる位さか足輕でも仲間で
も二本さしさへすれば縁もねいものを呼び捨てにして我
生酔の嘔吐を拭はせ我雪隠の掃除とさせる様あ事で人間
同士同等の權なのに構はねいで我勝手を募り我都合の宜
い様にして人の自由を防げ人の權利を害するは上さる人
程甚いから悪人といふのは上たる人が即ち第一人の邪魔
を働いて一生を安樂に暮すものが有れば夫が爲めに苦めら
れる人は數限りなし(以下)

明治十一年十月三日 出版御届

○一冊定價金五錢○十冊前金四十五錢○二十冊前金八十四錢但遠國遞送ハ此小
三郵便税申受候且又前金相切候共送致差留御沙汰無キ時ハ引續差上可申候
竹天堂住居の儀五番改正六番地と相成候間以來は六番地
と改め升

東 京 府 外 大 取 次 所

西京新	大坂堂	甲府常	橫濱辨	靜岡上	岡山縣	長崎酒	神戶長	尾州名	加州金	陸中盛	姫路田	淡路國
極	島	磐町	天通	川町	西大	屋町	狹通	古屋大	澤尾張	岡紙町	原町	洲本
太田	靜雲	中山	中屋	杉本	安中	日	松屋	雲根	澤田	伊藤	坂本	
權七	堂	綠郎	銀次郎	平七	與兵衛	堂	平兵衛	根堂	正助	和七郎	忠平	

函館上	石川縣	西京東	神戶北	野州椽	相州小	東京府	芝田町	人形町	虎門	錦町	總生	竹天堂
大工町	博勞町	洞院	長狹通	木萬町	田原	下	八丁目	通元	琴平	壹丁目	寬	堂
修文	永島	友田	弘讀	菅谷	綠町	大	芳文	大坂	霞	六番地	寬	堂
堂	新太郎	勘七	舍	甚平	石壽	賣	堂	町	堂			

著者兼出版所 假局 竹天堂

許免居憑稅定

總生 編輯

清徒會演說會

第二十七卷

沙大堂

明治十二年九月五日發兌

○八月二十五日上野御臨幸の大演說

目錄

毎月五日二十日發兌

外大取次所

東京府

西京新	西京極	太田權七
大坂堂	島靜雲堂	
甲府常磐町	中山祿郎	
横濱辨天通り	中屋銀次郎	
静岡工川町	杉本平七	
岡山縣西大寺町	安部勝忠	
長崎酒屋町	安中與兵衛	
神戸長狹通	日堂	
尾州名古屋大曾根	松屋平兵衛	
加州金澤尾張町	雲根堂	
陸中盛岡紙町	澤田正助	
姫路田原町	伊藤和七郎	
淡路國洲本	坂本忠平	

函館上大工町	修文堂
石川縣博勞町	永島新太郎
西京東洞院	友田勘七
神戸北長狹通	弘讀舎
野州椽木萬町	菅谷甚平
相州小田原縁町	石壽堂
東京府下大賣所	芝田町八丁目芳文堂
	人形町通元大坂町法木徳兵衛
	虎門琴平町靜霞堂
東京錦町壹丁目六番地	總生寛
著述兼出版所	同所
假局	竹天堂

總生

寬著 滑稽演說會第二十七卷

○八月二十五日上野御臨幸の演說

本羽 藏人

尙書洪範に曰く汝則有大疑謀及乃心謀及卿士謀及庶人謀
 及卜筮汝則從龜從筮從卿士從庶民從是之謂大同身其康彊
 子孫其逢吉汝則從龜從筮從卿士逆庶民逆吉卿士從龜從筮
 從汝則逆庶民逆吉庶民從龜從筮從汝則逆卿士逆吉汝則從
 龜從筮從卿士逆庶民逆作内吉作外凶龜筮共違于人用靜吉
 用作凶也、同ト事を澤山并べ立るは何だか演說れ枕言
 葉に働さがぬい様だが此文は古の体で仕方があし別に竹
 天子が作った文句トやアぬいから面白くない處は幾重にも
 御免と蒙りて此尙書の筋柄は天子様の御心に疑はしい決
 し兼る事があるならば諸官員や平民に問ひ尋ね又其上占

屋さんにも聞た方が間違が無いさうした時に自分の心に
宜いと思ひ占者も官員も民百姓も皆宜いといふは大同と
いつて此上あし飛切り無類の上首尾上出来だが先づ拾人
の中で七人が宜いといふ時は夫で宜い事と決着の相場附
け誰が何と言うとも願着すべからざる事あるに此度の御
臨幸は東京市中百万の庶民も奉迎を願ひ升といひ東京府
の官員も何卒其通りといひ大臣參議方も同く宜しかるべ
しといひ天子様も人民の望と叶ひて遣らせ様どの赦恩ト
筈は未だ何とも定らぬいから占せ呉れろと或る委員が郵
便を遣しよから竹天子沐浴齋戒すると三七二十一日あれ
ば掟通り昔風の身を淨め様だが文明開化四海昇平上下君
臣万歳樂の目出度事で國家の疑惑社稷の安危をいふ

微懼々々また事やアぬいから先づ我家の飯炊き釜に湯
を涌かし鹽と出して行水を浴び汗を取らどしたら鹽の籐
が緩んで湯が皆渡して仕舞たから井戸端へ行て水をあひ様
ど思たが否々急に身体と冷したあつぱ又例の疝氣の罌丸
が腫れ出すかも知れず是も先々勘弁もの容易な事へすべ
からずと朋友の數醫幹方子の忠告があるから町の温泉へ
行て二階へ上り込ま貸浴衣を着て汗を引こませ瓜蒞子の
壓し漬けに白湯と掛けて飯と食ひ葷酒固り山門に入ると
嫌ふにあらぬども自ら素寒貧の臺所腥いもの種あしの
無垢清淨乃ち口の中に乾元璋利貞拂ひ玉ひ清め玉ひと一
心不亂に筈竹と取りて繫辭傳の規則通り天數二十有五地
數三十凡天地之數五十有五此の變化をあして鬼神を行ふ

次第柄大衍之數は五十だが其用便とあす所の四十有九分
而爲二以象天地掛一以象三才揲之以四象四時歸奇於扚以
象閏乾之策二百一十有六坤之策百四十有四凡三百有六十
當一歲之日十有八變而成卦八卦而小成孔子曰夫易何爲者
也夫易開物成務而巳通天下之志以定天下之業以斷天下之
疑索隱鈎深致遠以定天下之吉凶者莫大乎著龜天垂象見吉
凶聖人象之是以君子將有爲也將有行也問焉其受命也如響
无有遠近幽深遂知來物非天下之至精其孰能與於此とさも
尤らしく道理と附けて筭木とひねくり廻し見れ出た所
の象が三三大過の二爻變トて三三感とある大過の大なる
もの過るあり乃ち天子様及皇族大臣參議其外諸官員の御
通りあり棟撓ひの本末弱ければなりと上象傳にいふから

何の差支えがありて御延引にでもならさけりやア宜が利
有攸往乃亨とあるのら御臨幸になるにやア相違さし山上
に澤あるの咸君子以虚受人と下象傳あるから人に虚とつ
かれて實に受けると判斷しての大違ひ我儘勝手を用ひす
人れ言ふ事と聴き入れて願ひを叶いせる象だから先づ安
心感の感あり柔上て剛下る下々のら強て懇願して貴き上
の方々と招ぎ奉る二氣感應して以相與止て悦ぶ上下の間
柄が思ひば思ひを好けは好かれ魚心に水心天地感トて
万物化生す聖人感二人感て天下和平共感する所と觀て天地
萬物の情見るべし誠に明治十二年秋八月廿五日天下泰平
君民和協か目出度い事にやア違ひねいが大過の九五に曰
く枯楊生華何可久也老婦得士夫無咎無譽熟此言詞を味ふ

るに枯れた柳に花が咲くといはんはんに鳥渡のあへり花いつ
 迄もかくて賑かな御祭り同様な銭の入る面白い事のある
 べき様いあし又年老いたる婦人が年若き事主を持つと云
 のも不釣り合ひの事だのら罪といふ程でなくとも立派な
 事だ手捌き事だと世間の人に譽られぬまゝいしが是れ大悪
 事だ大法だと誹り笑ふ程の事でもあく只其時限りの掛
 け流し只一夕の俄踊り同様を思ふ事といふ譯に聞えるが
 是れ易の言葉で當てになりた事やアねいからこんあ餘
 計を操り言のさらりと止めていよ天子様の御臨幸が今
 日にくと思つていると此節の炎さ氷さへ賣り切れて種無
 しにさる程な百度に近き土用中の容子の王殿が詩に祝融
 南來鞭二火龍二火旅烟々焼天紅日輪當午凝不去萬國如在洪爐

中五岳翠乾雲彩滅陽侯海底愁波搗何當一夕金風發爲我掃
 却天下熱といふ位だによりてあゝ以て宮中を出させ
 玉ふ譯に相あらず況て此程虎列刺の流行大勢寄れと塵埃
 も起ち穢い物も飛び廻る汗もかく身体も汚れるとらして
 も養生の爲めにならあいかから當分の處は御見合せにある
 どの事ゆゑ誠に早御尤千萬道理至極有り難き仰せなりと
 は存しあがら切角是迄色々用意をした事の贅になるの
 を惜んでやれくがつかり力落し馬鹿ぶししいとは言は
 ねいが不承ふ承の口の中提灯の赤玉を見て残念の涙をこ
 ぼし上野の山とにふんで思ひ出を度青息をつき天を仰て
 五感の歌と詠しあんなに杖ない同欲杯洒瀉まトりの愚痴
 言も光陰矢の如く日月の走るは鉄炮玉いつしか土用も明

け果て朝夕そよ／＼秋の風團扇と帷子に少し用のなくさ
る氣候となつたに附て又もや仰せ出されの御臨幸いよく
其日とあらぬ前から上はやん事ある雲の上人を始めとし
て高帽子の御方々夫から下は髭の長し短し電信の有る無
しに拘はらす亂痴氣騒ぎの轉手子舞ひ猫會の日の出の
盛り東京一の玉揃ひ舊弊風の金棒引き若衆天頭に裁附け
袴衣裳も帯も男の出立獅子の頭は風呂敷の中に忍ばせて
箱屋の背中に結び附け今日を晴れ一世一代御維新以來十
二年昔にかへる前表と徳川時代を其儘にうつせし染色縫
ひ模様皆銘くに旦那と揺ぶり或は家財と質入れ書入れ日
無しの金造借り込だか借りないの知らぬが上着も編伴
も物数奇な人の眼玉と驚かせ打ち揃たる人力車目鏡橋か

ら御成り道キヤリの聲を張り揚げて上野の山へ操り込ん
ど兼て期しる其舞と三尺棒で押えられ放歌高聲相あ
すまして程々素跳しと丸裸か等は思もよらずキヤリの見
込みは立消てヒヤリとしたる胸筭用是では折角工面し
仕事はさらりと馬鹿離しキヤリの因と尋るに淮南子には
耶許と書けり呂氏春秋云翟煎對魏惠王曰舉大木者前唱與
榜後亦應之此舉重勸力之歌也今人舉重出力者一人唱則爲
號頭衆皆和之曰打號東京府内十五區人民の總代委員の面
々縦横に馳せ東西に駆け廻り雨風晝夜炎天の厭ひあく一
生懸命の力を奮ひ人間一生百年の榮譽箇様を事と幾度も
又あるべきに非ざと思ひ口から火炎を吐き足血を出し向
騰に三里の灸と居えて其日の興と催はさんと目論見の注

文獻覽に入れ奉る品々諸藝の番附けは劔術槍術長刀鎖鎌
柔術流滴馬犬追物晝夜の花火を擧げるの竿上野の山内
は黒門の際にて垣と結ひ當日見物の鑑札所持無きものは
一人も通行相ならずと制し留められるのも知らねいで人
民の御馳走人民から奉迎した次第あればいはい亭主役の
形ちだから自分れ越工立てを伺ひ見る事によもや出来ね
い事は有まど息と切て馳せ附る人力車馬車の乗り合ひ
徒行既の人々老若男女上中下三等の別ちなく四方八方十
圖二十圖稻麻竹葦と混雜はたし合ひへし合ひ芝居れ木戸
口奇せのはね時位の事トやアねい二階を借り切り階子と
掛け物乾しへ上り踏ま臺をゑし肩馬に乗り長竿の先へ登
り木の枝へ取り付き風船と漕ぎ出し雲に跨り霧を起し砂

煙りに打ち混りて寄り来る炎天の苦しさに氷水を飲んど
すれに既に賣り切り只の水を汲み取らんとすれば是もか
らくも底と見りして泥と芥との混浴物仕方あくく唾と香
と滴る汗に喉を潤はし喘ぎて行く様ハ夫の曹操が士卒
の渴を留めん爲めに此山と越れハ直に梅林ありと欺た作
速を思ひ或ハ前九年の奥州征伐源頼義が弓の先で岩と突
き水と出せし故事を思ひ又ハ其角が名代の發句田を三圍
の神ならばと夕立の雨乞ひ小野の小町が断りや日の本な
らバ照りもせめさり迎ハ又雨が下とハと法律上で雨禱り
司馬仲達が胡盧谷の焚き打ち犬山道節が火逆の術観音經
の假使興害意推落大火坑念彼觀音力火坑變成池四苦八苦
焦熱地獄に落ちた様亦苦惱をしても切手がないから昔の

箱根の關所同様只中へ這入たもの八十万の人口でも織
 に二千五六百外で風説と聞く所の先づ一番が劔術の試合
 荒木又衛門に宮本武三四吉岡兼房に石川軍刀齋千葉周作
 に柳原劔掃槍の試合が寶藏院覺禪房に後藤又兵衛加藤清
 正に本多平八郎佐分利伊之助に山本勘助銷鏢が宮城野
 信夫浮れまいぞへ松島はどりシヨンガイとわしが國さの
 文句通り夫から柔術の立合ひ澁川八郎右衛門に石又衛門
 關口彌太郎に山中鹿之助平井權八に四王天但馬守と正度
 もかい中にも其道の始めを聞くに武備志にハ拳といふ古
 ハ手搏といふ我國に於て之陳元贊といふもの渡り來りて
 江戸淺府の國正寺に寓居して其寺に居る浪人も福野七
 郎衛門磯目次郎左衛門三浦與次衛門の三人に向ていふ事

には明朝に人と捕ふる術あり我故と知らずと雖も其技を
 見たる事ありといふを聞て其寺に寓したる三人の武士工
 夫して其技に熟せり此技の旨とする所は虚静を専らにし
 て物と咎めを物に觸れ動かす事あれば沈て浮ばすといふ
 因て之と柔らかなる所よりヤハラと稱す此次は騎射を行
 ふ乃ち流鏑馬に亡て馬上よりの的に射中るの術壹番は鎮西
 八郎能登守則常二番は櫻井甚左衛門同甚助夫より數名の
 射手何れも手際上出來のよし又々因にやいて弓の古事
 を尋るに舊事記に天照太神弓彊をふりおこし玉ふ事あり
 河海抄には伊弉諾尊は時既に弓あるよし人皇の世に在て
 は綏靖帝の時弓部稚彦として弓を作らしむと日本記に見
 たり鏑は舊事記に天孫降臨の時大伴連祖天忍日命に天

磐鞞を負ひ臂に移威高朝と若き手に天梃弓天羽々矢を取
 り八目鏑と副ひ持ち又頭椎劔と帯て天孫の御前に立て先
 驛すといふ騎射は日本記に天武天皇の時始るとあり賭
 射は又天武の五年正月祿と置て西の門底に射さしむ的に
 中れば祿を賜ふ事差あり又東鑑に流鏑馬とよめると矢伏
 射馬の義なるべく是は神前にて執り行はるゝ式にて尾張
 の國國府の社に流鏑馬の神事あり神人馬に乗り桃の弓と
 もて弦打す是は梅花無盡藏に載せられたる古き事と見
 えたり夫ら花火の番組は菰野流の名人が尽力したる事
 あるれば黒玉あどい一ツもなく皆空中に舞ひ開き月に時鳥
 の形あれば鍋蓋に楨ざつばうあり源平の旗色あれば書生
 のへこ帯權助の積鼻揮あり燈籠流しの鴛鴦鷗あればシヤ

モにムク鳥あり鯨に猫の狂ひわれ鯨に鯨の丈け競べあ
 り其外色々様々の打ち上げ物晝夜の敷の十二万三千四百
 五十六本七分八厘九毛とこそ聞えたり夫より養老の典
 を行いせられるに附ての東京府より兼て御觸れと出した
 る事なれば年八十歳より以上のもの子に手を引れ孫の肩
 に乗り曾孫の腰につかまり玄孫の天頭に取り附き杖にす
 がり車に乗り駕に乗り番に乗る物戸板に乘せられるもの
 いなしと雖も成る又け年の多いものと擔ぎ出すのだから
 其家の騒ぎは大變の向のど前の日から用意して當日の仕
 度にい便瓶か厠の類を携え眼鏡頭巾安火置巨燵大和火鉢
 腰伸し氷鼻拭き都て佐速の用心専一にして無調法不体裁
 の事無き様精々注意と加え押し出したる年寄りの惣大將

の日本橋區で一万三千人其内一番の年寄りが七百二十歳
 京橋區から五千五百人其内高年のものが六百十六年神田
 區かゝる二千二百人其内長年の分が四百三十年其外諸區の
 人員の中々以て仰山なり中にも年寄りの壯健且つ辨舌の
 爽かある桂庵婆と子取り婆取り分けて眼位たのり今度
 新登りの役者尾上多美藏三十二年前に壯の男で有たさう
 ぶかゝる今早天頭の硝燈の光りを欺き腰の屈て西洋飾の
 如く只依然として昔の通りふ思議千萬なるの腰間の名作
 物村正よりも鋭とく正宗よりも利れ味よく將に東京の婦
 人をして片端より戀死せしめんとする勢ひありと聞き及
 べり分けて只今真最中の狂言寺の小姓に扮ちたる所の何
 ば紅粉と附け皺へ火熨斗と當て引張りよりと雖も六七才

の稚兒と見えるの昔越後の國へ出稼きの芝居の砌り戻申
 山に於て蝦蟇仙人より妖術を傳ひ受け又丹後の國へ行た
 時に浦島の子に出逢て玉手箱の古物と買ひ來りたる故あ
 りと誠にさもあるべき事ならん然り而して平生は一芝居
 五六十日間の給金千兩の身分なれども皆浮氣の徳用向さ
 正直正銘の得物とは急度請け合ひ兼る御辭義商賣最負の
 客の蔭に飯を食ふ中に此度の壹人前に付下し置かる酒
 饌料やら何やら其名義は儘に存ト奉らずと雖も金高銘々
 廿五錢宛少しの様だが是こそは冥加至極の賜り物子孫
 くに傳へて以て譽れの程と示すべし其他其日に諸藝を
 せし人々や委員の方々に皆夫々の下され金何れも頂戴物
 の有り難きと謝し退散に及ばぬ先きに外面の見物人々皆

思ひくは散亂する中に若いもの計りでもあくる年寄りたる人も今日の晴れ事と見物に出掛けたる喜びの餘り急に陽氣にあちて忍ばせの池より西の方に向ひ車を飛ばせる者もあり上野の山下を北の方へ針路と向けて坂本通りより右に曲り龍泉寺町より御定りの吉原御殿へ参内するものもあり數寄屋町の料理屋待ち合ひに押し上りて地猫を呼ひ來るものもあり少し飛び下りて講武所のベンと明神の山上及び其麓なる柏屋花清神田川等に屯するものもあり山下の鴈鍋に押し込で腹を肥す族もあり大道の天猷羅を食て虎列刺に似た下痢腹と煩ふものもあり腰の巾着をすられるものもあり天頭の簪を抜かれるものもあり引き連れた洋犬を失ふものもあり時計を落すものもあり拾ひ

ものを當てにしてまごく歩行ものもあり借金取りも出逢て面の皮とひん剝くられるものもあり踏み倒されて直に病院に赴くものもあり喧嘩に負けてやけ酒を呑むものもあり此度の騒ぎに浮れ調子に乗りて搭別の穴を明け其金方の埋め草の事より起りて仲間問着と引き出し勘解へ願ひ出しの手續をなしむぐりの代書代官を頼むものもあり意恨を受る覺えのもの暗の夜には悞れて門へ出ぬものありりどの無茶苦茶無分別八公社會金太仲間奮弊のチヨン齧天保時代の樂灌天頭のみにして聖人居と同行もども如何どもすべからざる下愚の小人決して氣に留むべき族にあらず抑今般の盛舉に於る誰道君王行路難六龍西幸万人歡地轉錦江成渭水天迴玉壘作長安といふ様な天下に亂臣賊

子が有て我が居所を失た唐の玄宗が蜀の國へ禁塵の騒ぎ
 とい天地雲泥貸したものに借りた奴程の違ひ万人歡ぶ所
 か東京住居の百万人其外諸府縣に於て聞き及ぶ人々の歡
 びの幾千萬の數知れず宋之問が歌に下嵩山今多所思携佳
 人分歩遅々松間明月長如此君再遊分復何時賦に之に擬し
 て言うものさらの山野を下れば所思多權的を伴て歩する
 事遅くたり山上景色長へに此の如し天子の再幸又何れの
 時ぞと名残り尽さぬ諸人の喜びなるを新聞の社説や演
 説の口上やらやれ餘計な事ぶの厄介だの役に立ぬいのよ
 まばよいのにと種々雑多の論説は尤らしく聞えるのもま
 んざらあいとい言ひ難いが凡そ此節の人情といふもの
 愛國を後ちにして自分一己の私と先きにし陰徳を嫌て陽

報を望と名利を専らにして道徳へ唾を吐き掛け是の陳腐
 だ新らしからず漢學癖だ西洋風でねいと兎角上邊の虚飾
 先生深切も無く情けも本主に心掛けず見よがし聞けがし
 知れよかし評判さへ高くあれは其間に立て徳が取れると
 只々利欲に悟りと開き人れ爲めだの世間の益だのと口で
 ないふ様なもの、眞の忠だの怨だのといふ昔風の損勝ち
 不便利の事い好まねい狡獪猿智慧の山師の口から吐き出
 す論理はあかく淳子髡だの告子だの蘇秦だの張儀だの韓
 非だの申不害だの商鞅だの李斯だの跡部長坂だの小野九
 太夫ぶの柳澤彌太郎だの原田甲斐ぶの大槻傳藏だの薬師
 寺だの岩永だの位な事に非ず智の非を飾るに足り文は姦
 と隠すに足り只人れ論と反對の説を立て勝ちを取る了簡

だから何事に寄らぬ人のしゝ事は何と云ふか彼と云ふか瑕を附けて悪くいふは是迄何事に附けて皆取々の支那救恤民撰議院の遅し早し舊幕の時に王政が宜いと言ひ王政にあれば舊幕の事ひそく譽め立てる族も無しといひ難し昨日の忠臣今日の反逆兒職非役の時官に縁のあるものと悪く唱ひ等外雇ひの小役人でも拜命するや否其日から只の町人百姓無役の士族無祿の論者と糞散々に蹴散らして課長の氣に入り上役の機嫌を取るのと持前は我務めより大切に取り廻すのが通常の人のさあらず一廉の名前を揚げた人々でも表裏反覆己が田へ水と引くのと上手として眞の利害を國の爲め人の爲めにと論詰社稷の安危を氣に掛る心得あどり流行せず先其時の都合の宜い事專一に

舌を遣ひ口を廻はして學者より英雄より豪傑より素人かどろし到底目當てて金の一字或の時の役と引き受け或は名前を擔ぎ廻し跡くの爲め今の爲め我身の爲め言に及ばず權的の爲め猫の爲め狐の爲め狸の爲め其外爲めにする所の表式の名目に商法だの建白だの會社だの施だのと色く品く數多ければ詰る所の人氣を取り世間の用ひを能くされて功名手柄と我獨りせしめて置て何事も徳用向きとかすりどを外へ遣ふとどかんもふの山師狂言追々に
明治十一年十月三日 出版御届
○一册定價金五錢○十册前金四十五錢○二十册前金八十四錢但遠國遞送ハ此外ニ郵便税申受候且又前金相切ノ候共送致差留ノ御沙汰無キ時ハ引續差上可申候
弊堂住居の儀五番改正六番地と相成候間以來は六番地

此 免 送 遞 稅 也

總 生 編 輯

滑 菫 音 演 說 會

第 二 十 八 卷

竹 天 堂

明 治 十 二 年 九 月 廿 日 發 兌

○ 帝 王 の 師 と する 者 を 求 む べ き 大 演 說

目 録

每 月 五 日 二 十 日 發 兌

東 京 府 外 大 取 次 所

西 京 新 京 極	太 田 權 七
大 坂 堂 島	・ 靜 雲 堂
甲 府 常 磐 町	中 山 祿 郎
横 濱 辨 天 通	中 屋 銀 次 郎
靜 岡 江 川 町	杉 本 平 七
岡 山 縣 西 大 寺 町	安 部 勝 忠
長 崎 酒 屋 町	安 中 與 兵 衛
神 戶 長 狹 通	日 弘 堂
尾 州 名 古 屋 大 會 根	松 屋 平 兵 衛
加 州 金 澤 尾 張 町	雲 根 堂
陸 中 盛 岡 紙 町	澤 田 正 助
姫 路 田 原 町	伊 藤 和 七 郎
淡 路 國 洲 本	坂 本 忠 平

函 館 上 大 工 町	修 文 堂
石 川 縣 博 勞 町	永 島 新 太 郎
西 京 東 洞 院	友 田 勘 七
神 戶 北 長 狹 通	弘 讀 舍
野 州 椽 木 萬 町	菅 谷 甚 平
相 州 小 田 原 綠 町	石 壽 堂
東 京 府 下 大 賣 所	芝 田 町 八 丁 目 芳 文 堂 人 形 町 通 元 大 坂 町 法 木 德 兵 衛 虎 ノ 門 琴 平 町 靜 霞 堂
東 京 錦 町 壹 丁 目 六 番 地 著 述 兼 出 版 人	總 生 寬
假 同 局	竹 天 堂

總生
寬著

滑稽演說會第廿八號

○帝王の師たる者と求むべき演說

路尾菊太郎

孟叟曰く將大有爲之君必有所不召之臣欲有謀焉則就之其
 尊德樂道不如是不足與有爲也故湯之於伊尹學焉而後臣之
 故不勞而王桓公之於管仲學焉而後臣之故不勞而霸今天下
 地醜德齊莫能相尙無他好臣其所教而不好臣其所受教湯之
 於伊尹桓公之於管仲則不敢召管仲且猶不可召而况不爲管
 仲者乎韓退之曰古之學者必有師師者所以傳道授業解惑
 也人非生而知之者孰能無惑惑而不從師其爲惑也終不解矣
 生乎吾前其聞道也固先乎吾吾從而師之生乎吾後其聞道也
 亦先乎吾吾從而師之吾師道也夫庸知其年之先後生於吾乎
 是故無貴無賤無長無少道之所存師之所存也此位で師の

是故無貴無賤無長無少道之所存師之所存也此位で師の

説の御仕舞ひとして本文に取り掛るべき筈なれども未だ
 味の有る文句があるからもう少し書き升嗟乎師道之不傳
 也久矣歎人之無惑也難矣古之聖人其出人也遠矣猶且從師
 而問焉今之衆人其下聖人也亦遠矣而耻學於師是故聖益聖
 愚益愚聖人之所以爲聖愚人之所以爲愚其皆出於此乎愛其
 子擇師而教之於其身也則耻師焉惑矣彼童子之師授之書而
 習其句讀者也非吾所謂傳其道解其惑者也句讀之不知惑之
 不解或師焉或不焉小學而大遺吾未見其明也巫醫樂師百工
 之人不耻相師士大夫之族曰師曰弟子云者則群聚而笑之問
 之則曰彼與彼年相若也道相似也位卑則足羞官盛則近諛嗚
 呼師道不復可知矣巫醫百工之人君子鄙之今其智乃反不能
 及其可怪也歎聖人無常師孔子鄭子萇弘師襄老聃鄭子之徒

其賢不及孔子孔子曰三人行則必有我師故弟子不必不如師
 師不必賢於弟子聞道有先後術業有專攻如斯而已先づ是で
 韓退之の方は濟だが初唐の人物で太宗が位に即た時に上
 へ差出た大寶の箴に又一倍分り易い説があるから甚長々
 しい様だがといつも極りの言譯文句又始たと思召の程は
 實に早一言の申上様も之無く恐縮の至りに得とも言ひ
 たい事を言ひす仕たい事を忍耐すると淋病にあるといふ
 から澤瀉猪苓湯なごの御世話あるよりも寧ろ客様方へ
 誤り入て書立るに如くはなしと又張蘊古が言ふ事には
 爲君實難主普天之下處王公之上任士貢其所求具察陳其所
 唱是故恐懼之心日弛邪僻之情轉放豈知事起乎所忽禍生乎
 無妄固以下聖人受命拯溺亨屯歸罪於己因心於民大明無私照

至公無私親上故以一人治天下不以天下奉一人上身為之度而聲
為之律大事の極點肝心の要石といふのは天子様は御身分
人は是れ万物の靈天地の間人として以て貴しとす人の中では
天子様を以て最上飛切り無類無二の高貴尊爵大官多祿福
徳無量大業の二百十二度人民の了簡が沸騰するのも寒暖
の氣候が變るのも彗星の出るのも西郷星の見られるのも
米が一升百になるのも藝妓が五十錢で枕を附るのも御成
道へ提灯が下るのも皆天子様御一人の御心次第でなる事
だから誠に是れ大切の御身の上ある事今更いふに及ば
ぬ舊弊文句の様だが今文明開化賢人の寄り合ひ才子の集
り所學者の屯所物識りの本營利口の流行新發明の汐先
一事として關する事なく一物として備はらざる廉さき便利

調法といふ迄もなく聖人の智も行き届かざる所顯微鏡の
眼も及ばざる所に至る迄悉く開聖して鋤き入れ鍬と遣ひ
楊枝で重箱の隅なごのまぶおろか粟粒へ萬國の地圖でも
書き兼あい巧妙を極め智力と尽して規則を立て法律を定
め取り消しの跡から見合せの御沙汰に及び昨日の新令今
日改定今日の御觸れ明日の取り捨にする程精を窮め微と
竭して少しの不便でも纒かの不都合でもあさば必ず直
様改める位だのら上の上の點を掛け至極の頂に極
この段を加え何一として指のさま様批判の仕様がな
の中日本開關以來未曾有の御代と相ひなつたゆゑ只
御目出度候御吉慶の至りなり安堵の最上なりと枕を高
し腹鼓と打ち足と伸して太平の恩澤と蒙るべき時なれ共

思ふ事一ツ叶ひバ又二ツ空房冷床あれんぞんあへチャで
も女房がほしいと思ひ出来て見れば宜いのも思ひ宜いの
を**持て**バ**權的**を望む**權的**も有れば**藝者**買ひ**女郎屋**の居續
我家の米の飯より隣**の**麥飯が甘い様に覺え酒を飲て酔ひ
醒の水を呼ひ茶と喫り茶を飲て菓子食ひたくあり菓子
と食て口直しに香の物を食ひ香の物を食て茶漬飯を好み
飯の前に又酒の燗をさせ酒の肴に煮肴さしみ照り焼椀盛
茶椀蒸し酸貝氷貝鮎の櫻煮玉子焼鳥鍋牛のピステキそろ
く西洋料理に取り掛りてテーブルに對し肉刺と以て精養
軒の席に列れば髭が延したくあり洋服が着たくあり洋犬
を連れたくあり洋語と覺えたくあり煉瓦住居にしたくあ
り門の中外へ樹を植たくなり洋行とまたくなり商法を開

さくくなり損をまたくなりはまないが馴れあい事だか
徳が取れねいで身代限の札と掲げ奉る日本橋の開帳札同
様に道路に曝し物耻のかき上げ世間へ面出しが窮屈にな
るかと思ふとなわく以て左に非す其頃は早人すれ世間馴
れ狡黠道卒業になるから平氣の平左衛門のんこのシャア
糞取りに握り屁地獄に罪金損料屋の武遊女の瘡疵はども
氣に掛るは勿論却て人に向て自慢らしくおれば何万兩幾
千圓の借金をする程の働き物悔しけりやアまてみる素人
に出来るものかと飛だ黒う人商賣人を鼻に掛る段にある
追くの塔長自然にこの習慣に覺えず知らず先へ先へと泳
ぎ出そのは人間の欲に留度なし方圖の山留り是が果だと
いふ堺が無いから此上にも猶宜い方法存分の御政事向き

望外の御規則泰平の坂と越して快樂の谷と過ぎ西方淨土
彌陀の御國極樂界へ籍と送り、ヤ斯うなつては何院とか
信士とか名目が變るから眞平御免だか成り宜い仕方が
所望だから今御代の盛んな時でももつと宜い事はある
まいの何か御關典はなうらうか筆の入れ様は見つかるま
いか一本横槍の入れ様は有るまいかと日夜苦辛する事三
十年餘り蘇武が夷狄の囚はれ中娼妓の年明きよりも永い
年月と胸に手を當て考えみればオヤジャおれより年が上
だの雨の降る日は天氣が悪いどのコロリの門には黄色い
紙が張て有るだの去年の新聞は買ひ人がないだのと極た
文句は思ひ附くがゑかく以て猶以て智仁勇三徳孝弟忠信
何一つとして申分のまい明治の御治世さすが大賢明と新

聞屋れ贊揚し奉る丈け有て一點のかるか針で衝た程も申
上様のまい中にも何かと穿り出す氣の氣でゐても世界各
國是といふ取るべき事を取り集め大成えた金聲玉振今時
近世の振り合に有た事を引き出し位々やアかつ附かぬ
いからずつと昔に立返り古い文句を引き合ひの枕言葉に
いふ通り大工左官や醫者の類ひでさへ夫々に親方と取り
棟梁に隨で其道を稽古するのに天下第一人間の總隊長天
に繼て生民の大黒柱となる天子様には尤も御師匠さんが
なければならずといやア有るともあるとも大有りの證據
現在の御稽古事御馬御歌に御手習ひ御讀物を始めとし
て其外一切の諸藝に於て皆夫々に御教授申上げ御勉強も
亦格別に遊ばさるゝに相違あし猶其上に内閣に願問の

御役の薨くなつた木戸公の様な人もあり又其外に御尋ね
の其折柄の御對ひ申上べき其人はいくらも有りといふべ
き今此篇にいふ處の師範といふの左に非ず周の太公呂
望周公旦と直下げにあつて商山の四皓張子房諸葛孔
明の劉禪に於るが如き輔佐羽翼聖と稱し大賢と唱へる程
の人物が御側に有て萬事万端申上奉る様になつたあらば
此上に又格別な美しい仰せ事も有り朝夕の御行ひにも天晴
後の龜鑑ともあるべき程の御事の寒夜に御衣を脱せ玉ひ
林間に紅葉と焚て酒を暖め香爐峯の雪の簾と掲げて看る
だの民の籠の賑ひにけりだの昔の跡の話のみならず今も
何卒青史に書して益天子の尊きを感じます事柄の著
られる様にまといと思ふ計が欲の上の欲の望み十分の極

の十二分の願ひ事といひばランメイ何ぬかす開闢以來
比類のぬい賢明の大才子良相名將山の如く大臣様方参議
諸公何事によらず深く心を用ゐて天子様へ申し上げ聊
け目のない廟堂の御役柄といふかも知れぬいが抑木戸公
の如きは明治維新の功臣と稱すべけれども道德者に聞え
もあく學藝の達人とも世間へ知れず顧問の任に在る時に
何といふ事と申上げて天子様の御一生の美事となるべき
程の績を遺せしや我輩未だ存し申さるが論より證據況
や其他の方々今日迄何が何といふ諫めの話しも心附きの
筋も一向に聞えた事を知らず只此儘で過たあらは天子様
千秋万歳の後何と以て後世に是と申傳へる事あるべきや
あやゝわからせやの我輩共が申上るの勿体なき事にて口

が曲るかどうだか知らねいが只々世間のいふ所での誠に
 早目出度い御代實く以て文明の時節開化の折柄便利調法
 を御仕方といふより外一言一行の舉て以て千秋の美事と
 すべき事のないの即ち太平の極聖化の最上かも知れね
 いが堯典でも舜典でも禹謨でも其以下商の始めも周の先
 祖も漢魏六朝元明清抑鴻基を創め中興の業と立直た名君
 に一人として何と彼とか話の種にならねい事を聞かず
 さりながら天下の政事は一令の出る毎に皆天子様になり
 代りてする事だから皆天子様の御手柄仰せ言といつても
 よい様も事だが是は夫々に受け持の御役人元老院だとか
 司法だとか内務だとか太政官だとかが有るから其方々の
 骨折りと思ふ人があいても言はれず左すれば實地の所は

折々の御製の御歌上野御臨幸の御時に給ひらせよる御金
 等の事が眞の聖意に出させ玉ふ事なるべし位を誤解する
 人もなしとの保証し難しと云様が去まいが今の處では立
 憲政体だから天子様直く思召から出る御事に別段及ぶ
 まし其爲めに諸役人を置くのだといふかも知れねいが夫
 では天子様と庸常の天子様に去奉る計りて臣下の職分を
 尽す事といひ難しいかんとあれば我國の各國と違つて
 万世一系固り天子様の御國ぶから願はくは何事も御聖斷
 に出て大臣參議の黜陟を始め百揆皆慮より定り御獨裁
 立君の政体を主として弊なき様にすることを大日本國豐葦
 原の性質とすべし然ると未だ御幼冲の時様ないつ迄も
 思召を改めずして只太平の天子様誠に御目出度き次第な

りど祝し奉る計りて其權自ら當路の諸公に歸させる了
簡もなく歸する筋もあく自然天然相あるの物は道理其權
自然に下に歸すれば天子様の方がいつとなく御位程に御
聖徳を慕ひざる様にならば我大日本の精神の何れの處に
在りせんとせんや去り乍ら治療の法に委しかつざれば匙が取
れぬ藥を盛るに醫學をまねいぢやア疲我慢の數醫竹庵
老の人の命取り生民の大禁物眞平御免ぶが親の藥箱と持
ち通し父の玄關に病家の藥取りが絶えぬ様にするにや
ア是非とも勉強して醫術の研究が第一だが其醫者がなく
ありやア外の醫者が出るから病氣にあつた人民にやア一
向困る譯のねいといふかも知れぬいが夫の其醫家の忠僕
のいふ言葉に非ず他人の言ひ草路人の了簡決して頼母し

い論議ぢやアねい秦の時にいつた様に下の者が學問をし
て物と知れの上のいふ處に抵抗して治め悪いからと黔首
と愚にしよ話の反對で上たる人を成る丈寛裕に御仕立申
す見込か計り兼るが世間一般の論理説の扱置て我國で
の下勝ちにあるよりも上さる人が勝つ方がいつそ大きな
間違大さうなエタくのねい風だから武烈帝の様な御世で
も天が下に隠れ家もなしだの鴨河の水に山法師の我儘
に困るのといふ時節より餘程心持ちのよい大和魂でも
何の膽玉でも磨かざれぬ光りなし光りと出し直打ちと顯
のすにやア學問が專一學問の大體極た事の規則計りて定
法にからまる死物ぶから只夫計りて何もかも當にある者
ぢやアねい證據盡信書不如無書といふ前の人の言葉も有

り時に取り變に應して宜きと裁決するにやア賢人君子を
其左右に置いて討論研究するのが第一番の早廻り是則ち其
師たる彌分にして此卷の立物千兩役者だがなか／＼今の世
にやア聖人だの大賢人だのといふ様な變り物はないと思
ふかも知れぬいが古の猶今の如し古有るものあれば加藤
清正の様あ身の丈の高いものも弁慶の様な力強も役の行
者を見よ様な修行者も曾呂利新左の如き笑談ものも大久
保彦左を見よ様な一徹親父も紀の國文三の様あ大尽の金
遣ひも楠公の様な忠臣もさつと有るに違ひぬいが韓退之
が雜説にいふ通り世有伯樂然後有千里馬千里馬常有而伯
樂不常有故雖有名馬祗辱於奴隸人之手駢死於槽枥之間不
以千里稱也是馬雖有千里之能食不飽力不足才美不外見且

欲下與常馬等不可得安求其能千里也策之不以其道食之不能
盡其材鳴之不能通其意執策而臨之曰天下無馬嗚呼其真無
馬耶其真不識馬耶有た所が見附け様が悪いと目の前の物
も眼に附かねいのが俗物武陵の大守桃源に入ると能はざ
ると同ト事夫が常体一通りな名聞好き山師先生なれば自
分から賣り附るから人が知らずとも直に名前が出るが眞
の大人君子は求めないものを強て持ち掛けるのせり込ひ
のといふ様な品格の悪い事を好まぬい證據は漢の宮中で
毛延壽に賄賂と遣らぬい王昭君で知た事紅粉社會の人物
只人の愛と受け媚と献トて世渡りとする婦女子でさへ無
理無体に他の寵愛と受ると見て嫉妬を起しながら且那
取りを求めるといふ様な卑屈未練な行ひをせずまして天

下の奇人高士並々あらぬものに於てをやとぞ御願ひ申
 升何卒電信の手掛りの程とぞ只管依頼の儀とぞは申入る
 べき事あらす夫れ今の人才登庸法に於るや奏任以下は學
 問上の卒業免狀などによりて引き上げる事もあつたが夫か
 ら上は薩長土肥と始めとして王政維新の際に錦旗の御手
 傳に附て實功あるものを除くの外一人も其職に任ずると
 いふ事はあり門閥同様な風習なれば最早日本國中の人物
 は誰と誰と彼と是とより外あるべからずと直に算用する
 様にあり其甚さに至りては西郷江藤前原の類ひが死で仕
 舞つたから日本の精神が明治の初年頃に比すれば餘程減
 却したとぞ、臆測の妄説を唱へるものあり心なきものは
 全く其説を信じて若し外國と何か干戈事が始つたならば

困るだらうとぞ、思ふに至れり是れ決して然る譯にあら
 せ勅任の人が減れば奏任の中から引き上る奏任からで足
 りあけりやア判任等外から見立る夫でも數が合はあけれ
 ば平民非役の中から取り立るから何にも困る筋はないの
 に維新の際に平民は則ち平民丈けの直打等外は等外丈け
 判任は皆判任奏任の必を勅任の人に及ひざる様に心得る
 らふ起る事夫れ人への命あり時あり今關東から出て勅任
 の人なしと雖も必ず關東人が縮の性質計で西國人が何れ
 も大鯨の味ひあると限た譯にもあらず其時の風次第で一
 字一文解し兼るチンチンムガムガのマドロス根生でも金
 の筋を附けて棒組の隊長となるものもありと言ひ、何か
 我身寄り味方の者計りを用うるといふ惡口らしいが是も

無理といひぬ事孔子も擧二爾所知といふから國が違ひ
出所が變れば其人の事が能く知れるいから用ゐない筈の
事どが斯く文明開化の時にまりて我國の内は勿論西洋
でも東洋でも南極地方でも北極近邊夜國氷海でも彼是の
差別を附けぬい世の中だから相成るべくは是迄の風を一
洗して折々の人の眼を驚かし人の膽をぶつ潰す様なら種
特別あ事があつても宜からうかど何時もかひらぬ竹天子
が人並み外れの飛び離れた空論の主旨意は聖天子をして
益聖たらしめ賢明政府をして彌賢明さしめんとする心
たる其本は我國の風は前にいふ如くどんる聰明敏智文武
の徳を具ひたる人物が出様が外の者へ讓るべき事のあい
天子様だから餘の國の法に無き所の亦御勉強を遊ばさ

るを得す古の典籍を稽ふるに克明俊徳以親九族九族既睦
平二章百姓百姓昭明協和万邦といふから上御一人の俊徳を
明かにする御學びは師傳保の任を置かねいとやア書物の
上の事許りでは時に取ての万事万端急度間に合ふ譯にや
アいかずと言は、是非肝要な事柄あのを今迄諸君子が何
共言はぬい筈はぬいと思ふだろうが近世は支那も我邦も
此師傳といふものがあくて諫議大夫と名ける役と置く位
が精々の良法となりて昔の大師ぶの阿衡だのといふ事は
消てなくあり西洋諸國では只耶蘇諸宗の坊主と貴で帝王
の上にも置く風儀は有るが夫も近來は迂遠な事になりて役
人が政府に立て法律と定めて人民を治める様にありとこ
の國にも無い事だから我國文明の賢人達も亦自ら左様

隠居くさい事に頓着えない故の事誠に今の世に取ては餘
 計事の様だが實地に行たまらば必ず爲めにある事の有
 るのは受け合ひの見込みたる其譯が先づ國と治める最初
 の最初根本の根本たる元素は諸官職を勤める人の心を正
 くして良法の立つ様にするのが始り諸官職の大本は天子
 様より本なるはなき故古人は面前御諫言申上たり事を書
 して上りたりして天子様の御爲めになるのを第一としよ
 もの既に帝範といふ物さへありて天子様の御心掛の規則
 とした程の事仲應之誥曰能自得師者王謂人莫己若者亡好
 問則裕自用則小又太甲曰無安厥位惟危一人元良萬邦以貞
 一人とは即ち天子様の事又大學に一家仁則一國興仁一人
 貪戾則一國作亂と只御一人の御身の上よりして治亂興廢

の兆をなすの天子様より重きはなし今三井鴻池等の豪
 富家の主は親ら算盤を取り筆をひねくり廻さずとも支配
 人番頭其外の掛りくの者が有るら晝寝計りして事が濟
 む様なもれだが親ら其事と執り其筋を辨へて人を使ふ方
 が急度宜いに相違あし高が町人の身代でさへ左の如し况
 や國土を有し人民の長たる御位に於てとや申し分のあ
 上にも申分のない様に爲るのが聖の聖たる所あるべし多
 罪多罪味死味死懼れみかそれみ畏みかしてみて申す

明治十一年十月三日

出版御届

○一冊定價金五錢○十冊前金四十五錢○二十冊前金八十四錢但遠國遞送ハ此外
 ニ郵便税申受候且又前金相切レ候共送致差留ノ御沙汰無キ時ハ引續差上可申候
 弊堂住居の儀五番改正六番地と相成候間以來は六番地

東 京 府 外 大 取 次 所

西京新	京極	太田權七
大坂堂	島靜雲堂	
甲府常磐町	中山祿郎	
橫濱辨天通	中屋銀次郎	
靜岡江川町	杉本平七	
岡山縣西大寺町	安部勝忠	
長崎酒屋町	安中與兵衛	
神戶長狹通	日弘堂	
尾州名古屋大曾根	松屋平兵衛	
加州金澤尾張町	雲根堂	
陸中盛岡紙町	澤田正助	
姫路田原町	伊藤和七郎	
淡路國洲本	坂本忠平	

函館上大工町	修文堂
石川縣博勞町	永島新太郎
西京東洞院	友田勘七
神戶北長狹通	弘讀舍
野州椽木萬町	菅谷甚平
相州小田原緣町	石壽堂
東京府下	芝田町八丁目 芳文堂
大賣所	人形町通元大坂町 法木德兵衛
	虎ノ門琴平町 靜霞堂
東京錦町壹丁目六番地	
著述兼出版人	總生寬
假同局	竹天堂

許免送遞稅定

總生 編輯

消徒言演說會

第二十九卷

明治十二年十月五日發兌

竹天堂

○官員撰舉法の大演説

每月五日二十日發兌

東 京 府 外 大 取 次 所

西京新	太田權七	函館上	修文堂
大坂堂	靜雲堂	石川縣	博勞町
甲府常	中山祿郎	西京東	洞院
横濱辨	中屋銀次郎	神戶北	長狹通
静岡江	杉本平七	野州椽	木萬町
岡山縣	安部勝忠	相州小	田原線町
長崎酒	安中與兵衛	芝田町	八丁目
神戶長	日弘堂	東京府	下大坂町
尾州名	松屋平兵衛	大賣所	虎ノ門
加州金	雲根堂	東京錦	町壹丁目
陸中盛	澤田正助	著述兼	出版人
姫路田	伊藤和七郎	總生	寬
淡路國	坂本忠平	假局	竹天堂

寛生 滑稽演説會第二十九卷

○ 官員撰擧法の演説

官員といひ舊幕時代の御役人様所謂御大老御老中若年寄御
 勘定奉行寺社奉行町奉行の類と始めとして旗本の用人大
 名の家老物頭より徒士足輕に至る迄一合取ても侍の二本
 手挾む武士の鈴木主水も平井權八も民谷伊衛門も小さん
 の金五郎も阿漕の平次も朝顔日記の徳衛門も落ちぶれて
 は之を浪士といひ元の何の何某人民の上には立ち政事の締
 め縊り國家の寐せ起しをして祿高をとり給金に妻子女類
 身の廻り一切の費用を辨する身分の第一番が攝政關白太
 政大臣と法性寺の入道計りに限らず右大臣の道實公のみ
 ならず左大臣の時平と後徳大寺に止に非老大納言中山

卿と尾張様に極た譯である中納言の家持と水戸の御隠居
新の字の附くの平の知盛長明の方で行平計りに抱た
筋でよく参議の篁産後の婦人血の道の養生三六は十八三
七は織田信孝三八は舊喜昇座の立役と計り堅く覺えてゐ
るの飛だ横道の寸方違ひ上等の御役柄の公家衆から高
家方大名小名の上に將軍職の淳和柴學兩院の別當源氏の
長者の徳川十五代伏見の戦争に於て政府へ尋問でいな
兵器を携え會津桑名を先鋒として繰り出した時に上方で
の關下を犯したといふ關東方のさうでない水掛け論な
ら宜が大炮を打ち掛けたに附て鎗の鞘を外し刃の電り血
の雨を降らせ爰を先途と戦ふか戦いぬい間に紀州路から
三菱の便船に割り込で横濱迄着の上鐵道の下等三拾錢の

切手に新橋のステーションかと思ふと上野の宮様へぬた線
り込と國の爲め民の爲めとて我身を忍ぶが岡に墨染の
袖と恭順の實効を表する爲め先祖代々貯ひの兵糧金銀武
具馬具は勿論江戸の城と明け渡しに及て永代歴制束縛御
威光の株式種失りの其跡へ入り代て總督の宮有栖川様鎮
臺府を置き夫から三條様が鎮將府と定め議定辨事の諸役
々参謀は参議となり浪人は官員となり脱藩の人は勤王と
なり忠臣となり王佐となり帝輔となり月給となり石取り
となり年給となり終身祿となり永代寄附の燈明料となり
門前に瓦斯燈を立てる身分となり馬車を居て置く猫を權妻
にする西洋料理を常食にそる鮎食ふ電信の柱にかちり
附くとは關東生れの元々朝敵派佐幕舊弊鬻の有る人貳心

のチヨンキナ連の事にして苟も薩長土肥の大國朝廷へ對しては忠義無類古今卓絶千載未有楠公に馬の口を取らせ藤房卿にシヤツポの座を拂ひせ和氣の清麻呂兒島高德と玄關の受け附けに使ふ大賢明維新の柱石王政復古の基礎明治政府の大黒柱大日本日本の命の綱諸官省の卿にして参議兼任の御方々に於ては暗殺と國事犯の爲めに貴重御道具掛け替の無い首を失ふより外御一人も免職を食つたる例はあるべき様なし是は實功を立て實地に於て九死一生七分三分の兼ね合ひ木曾の丸木橋より危い處を渡り透けて今日の御身の上の一勞兩逸猪を食た報いし腫物となり馴れぬ香を履て足の小指をすりむくと雖も是どの代りて積戰之家有餘計金銀澤山にして御遺ひ料に足福

長者の善人富み榮え惡人絶え滅びて目出度し々々々と赤本草双紙の結び芝居狂言の紋切り形いかにも然るべき道理なれば其下に附く奏任以下の方々も其通り廟堂に坐して官祿と頂戴して入つてゑやるの皆夫々に大小れ差別の有ても御手柄御功名の廉りなかく以て一朝一夕新聞社の起立人國立銀行の株主高島町埋め立ての人足請け負ひ方御祭り提灯の周旋人久松座の金主虎列刺の豫防藥施し差配の注意店子の心得芥溜め惣後架の掃除位な骨折やアねいからは是も亦其分限に隨てマボハゼとなり鱈となりサヨリとなりて官海に泳ぎ出し小さい賭の小さい丈けに振り動して魚類でいねい人波うに髭を延し高いシヤツポと被て世を渡るの即ち是れ當り前の事だが文明開化次第

に進み何も公平彼にも至當と物事の論理の宜いが上にも
宜い様にする了簡だから今の官員さんを舊幕時分の役人
に競べたら石嶮の箱に千兩箱格蘭士氏にブランドイ酒支
那の征伐に餉の重箱何と喻ひ様のない上くの御人物なの
をやれ電信だとかエレキだとか片書きと附けて新聞の種
にするのの只人の富貴榮達を羨み妬む計りでなく一粒撰
りを絹篩に掛け木賊で摺て油雑巾で拭き差配が口を利き
區務所で扱ひを入れ勸解で説得して初審裁判の見込みと
立て上等裁判へ擔ぎ出して大審院の仕揚げ司法省元老院
の岡目八目大臣の思召に隨ひ天子様の親裁と仰ぎ萬國の
公法に照らし天の照鑒を頼み地獄の淨玻璃に寫して過去
現世未來三世の因果二世の縁親子の一世世の中欲の上

の欲願の上の願好みに好みの色揚げ附録孫店引出し新聞
町屋根の上の屋根を附け尻穂に尻穂を繋ぎ出した日にや
アどんな明治の御政事でも人の口に戸を立られぬいと云
のは昔からの喩の通愛心情々温于群小愚圖といふやつ
にやア言ひして置が寛大の政馬鹿に附る藥のねいと聞て
聞ぬふり見て見ぬ積り勝手次第に下々の蛆蟲同様な我々
社會にまやべらして置くのの賢明の御徳と傷ける譯でも
あければ言ふやつも亦格別手柄にもならぬいの釣り堀
へ錢と出して鯉鮒を取り揚代金を出して娼妓を抱き寐て
居る者の顔を染ると違た事がなければ言た丈け損書た程
むだ骨といふ筋だが竹天子前世は嘘にして口と聞きたい
物を言ひたいと思ひ死になつた生れ代りの由三世相の本

にあるから。どうせ何とか。おまやべりをまたいのが持た病
前世の宿業豆蔵になるか。断家の前座になるか。未だ決着し
兼る所だからせめて筆先でなりとも。ベラうとやらかさず
んば有るべからずと思ふ位。赤血の循りの悪い魂根玉女郎
の瘡で鼻を失ふ郵便配達。の膝脚氣で三里の灸を居る湯屋
の三助。の水蟲で足の厄介。寫真屋と紺屋の手の先きと黒く
して一生を送ると。同ト事口の禍の門舌の是れ禍の根なん
ぞ。いふ事の棚へ上げて云事。一番言つて見にや。ならぬ
まやあいか。そこでくこいつアもし。平次でいあるまいかと。
ひよつと思ふて。問ひに來たのまや。覺えがなければ先目出
度い祝ひ事に。晩に來うおかささん。さらばぼんよ。てもまア
大さうなつたあと。追従輕薄穿く草履。雪踏片足と引かけて

足早にこそ逃げ出すとは。阿漕の庄屋彦作が文句だが固り
追従もせず輕薄もせず。勿論逃げ出しもせず。隠れもせず。イ
ヤモにっこりと笑ふて。潔よう首さし延べ。此所假壁にて讀
むべし。ナニにっこりと笑ふてアハハハハ。出かしかり升た
といふのは。寺子屋の松王と武部源藏がせりふ。虚と言はれ
るは。覺悟の前質と言はれう。とは。押の強い。覆首ではない。論
理家の。價言葉。葉夫れ。世界の治め方は。廣い土地に。多い人民物
事も。亦澤山だ。おら其エタ。騒ぎは。二長町の區裁判所が。淺
草神田を。持て居るから。今年の。勘解が。一万の上になつた。位
の事か。下は。道端の。小便所。人力車の。喧嘩。書生の。居残り。上は
西郷征伐。支那。琉球の。掛け合ひ。各國。海外の。附さ合ひ。振り富
國強兵。札の。通用。價物の。詮議。中野。藤田が。取調べ。から。國事。犯

の氣遣ひ虎列刺の豫防法新聞の検査演說會の目附等に
 至るまで種々無量數限りのない大小事件なく五人や三人
 で出来る事トやアねい證據は纒鬼が島位な處を責るにさ
 へ猿雉子犬の類と用ひ頼光に四天王足利に三管領四職徳
 川家の二十八將甲州の二十四將越後の十八將加藤の十虎
 森の三勇士芝山の二王近江の八景越後の七不思議是では
 飛でもねい方へ紛れ込んだが天下の事は一人で出来ねい
 から堯舜と言はれる高慢ちきな唐人でも八元八愷ぶとか
 見一無頭作九の一だとか算用には長束大藏大輔寺社方に
 は前田徳善院口先きの小細工は石田治部少輔とか其時の
 總長が浮多秀家其上が家康公と前田利家は後見職大老五
 奉行七手の番頭旗本は八万騎神の數は八百萬大坂が八百

八橋越後は八百八後家孔明の八陣お妻に八郎兵衛白小袖
 は吉原の八朔狸の罫丸は八疊敷八十末社の伊勢の大神宮
 様に在り八十れ通用で邪魔にされるのは天保錢八千八聲
 は時鳥八幡鐘は絹々に別れどむない送り船とは小歌の文
 句兎角物事の類を集め友を呼び力と戮せ心を同うして大
 功を樹るのが昔よりの雛形今の文明開化だからと言ても
 西洋でも東洋でも大事業を爲しよものに一正立ち獨身者
 お菜を貰て喜び笑ひをちし尻を放つてかかしくもあしど
 川柳や噺ひ話しの元素になる人物の何に寄らず成就する
 譯にやア行かねいからは是非大勢の手と借りて國の事をせ
 ざるを得せ其大勢の人と使ふの我が親類縁者女房の兄妾
 の弟戀女の従兄弟再従兄弟甚しさに至ての自分に御座て

居ると思ふ己惚れた箇から女郎藝者れ申し込みあの人は
 私わたくしの弟あにですが何か勤とめの口くちが有あり升まならどい他人たにん行儀ぎよ常つよ
 体たいの御お頼たのみ有あても無なくても是非ぜひ何かなにに使つかつてかくなさいよ。
 且また那な返事へんじ計けいりぞやア否いなですよ急いそ度どです虚うつろを附つくと今いま度ど
 來きたた時ときにやア食くひ附つき升ますよの。ヒッ爬かき升まよのといふぞ
 やれ言こと詞ことばに乘のり込こみ或あるひ同どう國こくから屁へ兒こ帶おび一本いっぽんで飛とび出だ
 した徒いたづら仲間なつか牛屋うしやの合あい合あい鍋なべ小格こざ子の居ゐる殘のこ矢場やば水みづ茶屋ちややの張は
 込こみ一ひとツ穴あなの狸たぬき獨ひとり寐ねの書よ生せい部ぶ屋やの五ご手て巧こう連れん其その外ほか進しん上じやう物もの
 を以もつて内うち玄關げんくわんから這はひ上あり臺たい所ところへ廻まり奥おく様さまへ相あ伺うかひ子こ供ども
 衆しゆへ御ご機嫌きげん取とり金銀きんぎんの御ご用よう達たし西洋せいやう料理りの御ご案あん内うち會かい席せきの
 御ご馳走ちそう芝居しばいの御ご伴ばん吉原きちげんの賄まわひ今いま春はるの會かい計けい引ひ受うけの廉れんを以も
 て能のなし藝げいなし才さいなし智ちなし澤たく菴あんれ壓お石いしを取とるか大飯おほいしを

食くふか居ゐ睡ねりをするか色いろ氣けが有あるの外ほか絶たて取とり得えのない
 懶なまけものヌラッラ育そだちの族やからを最い負さい引ひ張はり氣きに入いりの手て前まへ
 勝かつ手で役やく人にんに用もちひ當あた路ろの官くわん職しやくと授さづける昔むかしから仕し來きたり何ど
 處ところの國くににも有ある事ことで仕し方かた無なしと雖いへども一言いっごん半はん句くも横よこ槍やりの入い
 れ手てが無ない様ようにするにやア官くわん員いんとなして用もちふる人ひとの撰せん擧げ
 法はふを一ひと工く夫ふうせすんば有あるべからず夫それの只ただ上うへ邊へから見みた計けい
 人ひとのら聞きいた事ことを當あたてにすれば押おし出だし計けいり立た派はでも孔こう子し
 に似にた有ある若わかくもあり陽やう虎こもあり西さい郷きやう隆たか盛せいに似にた等どう外ほか先せん生せいの
 寫しやう真まもあり辨べん舌ぜつの堅かた板いたに水みづと流ながす様ようで蘇そ秦しん張ちやう儀ぎも吃く驚きり仰やう
 天てんすべき程ほどでも假か名なの附つかない新しん聞ぶんを讀よむ事ことの出で來きない
 講かう釋しやく師し断た家かの前ぜん座ざあり三さん十じゆ二に相さう拔は目めあし美み人にんの飛とび切きり
 別べつ續つの無な類るい小野このの小町こまち清せい少せう納な言ごん紫むらさ式しき部ぶの賢けん女によ貴き嬪ひんも是これに

ひ及ぶべからずと思ふ程でも一字を解せず一文を辨せず
操を知らず見識がなく色賣り一方砂糖屋の圍ひものとな
り中役者の權妻となりたる近來の評判もの金瓶の今紫菱
町のやつこの如きあり文學孟荀に次ぎ論說十哲よりも高
き學者でも己を召捕に來ると聞て手の舞ひ足の踏む所を
知らず終に天祿閣上からおつちて腰骨と打ち抜た揚子
雲あり裝束姿の小松重盛に髣髴戎服の有様の新政厚徳の
總大將に愧す烏帽子直垂に髭を延して居り込んだる處の
赤松滿祐本物よりも立派らしく見えても小理屈を並べ實
用の談判とするの山の手の差配人にも木葉代言程にも
役に立たぬい團十郎あり況や其他の俳優宗十郎九藏訥升
菊五郎以下のものに於てとや表向きの紅粉を塗り面と染

め鬘を被て髪を飾り衣裳を着付けて夫らしく見せるも其
樂屋の内幕を分析すれば三文おこしを賣る番太郎の倅何
某放下師の息子誰乞食踊りをして往來の足を留め二文三
文の御情錢と投て貰たのが抑藝道の由緒發端之を河原者
と言ひ大道乞食と唱ひ面を曝らし身を砂埃りの中に埋み
獸となり鬼となり泣く眞似笑ふ眞似腹を切る喉を刺す首
を切られる縊め殺される泥棒とする身投げをする惚た女
にかちり附く張り倒される何は狂言物眞似でも君子の爲
るに忍びざる醜体破廉恥之を人外の家業女郎同様と謂は
ざるを得せと言ひ淫事と賣らないにして娼妓の比較
は無理だらうと思ふが其内證を明けて見れば既に男地獄
の賞牌と受けたる位だから金さへ出せばせんな痘面でも

皺苦茶でも其意に靡ら其言ふ所に随ふて自由自在に御尻
の伽となし御寐間の御機嫌と取ら始末柄に至ては娼妓社
會と異なる所なき族計りかと思ふと世間の見掛け倒し買
ひ被りのヒケものハ數え擧るに暇あらせ只其人の眼鏡次
第鑿定の上手下手と言ひし。どうも其見分けとするやと
怪むの御尤至極せん眼の利た人だらうが人と知ると云
の。なかく難い事人の心處の我心でさへ酒の呑むまは是
からの辛抱ま様女郎にハノロケまは今よりしてハ改心後
悔誤り入て親の前へ詫言とするかと思ふと其晩の中に氣
が易りて又彼の許へ出掛るといふ様を譯で幾度か思ひ定
めて變るあり頼むまトきは我心とやらいふ古言なとと考
た時にやア曖昧の限りがねいからせめて我心丈けは先づ

我眼で見え我分別で自由になる見違ひ思ひ違ひの事
として置て人の身の上の善悪と見定るに一寸逢て話を
聞た位な事での口數をきくものもあり黙り好きもあり仮
初に見た位での建剛らしい病身もあり方正らしい放蕩者
もあり年を取た癖に至て彼方ハ若いものに勝るものもあ
り所謂小男に小何とやらなし大男に大何とやらなしの
凡そ人の心中の見極め程無づかしきものなし是に於
てか此篇の題號に掲げ出した官員撰擧の法といふハ例の
無分別向ふ見ずの手前了簡人様の中への差し出し兼る思
ひ附さだがくすね込で置た所が功名にならず陰徳になら
老思ひ切ていさみ出す方法ハ燕の昭王が費金臺を築て賢
人を招き込む時に樂毅の様な大物を引摺り込と梁惠王が

更不遠千里而來亦將有利吾國乎と言て孟軻のやかまし親
 父に仁義有るのまぶどか何だと言てけんつくを食た時
 の例に倣ひ爰に一つでも二つでも甲乙丙丁いくつでも虎
 列刺の避病院どの違て随分廣い處の汚らしくなぬ師範學
 校を見よ様なものを造り之を招賢臺の積りにして先づ上
 白の米田舎の極製赤味噌流山の味淋銚子の醬油池田伊丹
 の上酒の勿論ビール葡萄酒アルコールサンパン肉類餅菓
 子桃栗梨子柿瓜西瓜の類の上野の御臨幸に用意しよる食
 堂よりも澤山に積み重ね其外衣類調度一切の品は何一つ
 不足のさい様に貯ひ置き日本國中へ觸れ書を廻して一藝
 一能凡そ一並に勝れた智慧才覺有るものを是くが私の
 持ち前といふ事と言ひ立てさして若し申出るものが有れ

ば是非にも善惡にも馬にも鹿にも拘えらす皆其處に集め
 置き好きな事をさせ勝手な行ひをさせ思ふ儘の事を言ひせ
 少しも束縛だれ規則だのといふ窮屈な事をせせに十分に
 さして置いて何事の有る時には其中で平生の所業を見て見
 には此人がよからう夫には此者が相當あるべしと衆人の
 眼鏡を以て申し附けて差掛た事をやらして見れば論説よ
 りも實物に當て却て功能の有るものも有り又評判程は事
 の無いものも有り自ら相場丈け直打相當の事より外は出
 来ぬい段にあれば隠しても隠されす包でも包み切れず君
 子誰毀誰譽有所譽則有所試と現在の證據を取て其役と任
 せる時は法螺で計り押附かぬい實物經驗人の心といふ物
 は思ふ存分にまたいのが本來の性質だから百附が有ると

か監察か附てゐるとか。まゐけりやア自然と我持前の癖を
顯はすもの夫も一日や二日あらば何どかしてゐ様が長い
月日にやアさうく被り切れぬもの。玄やアぬいかゞ只飯と
食のせ銭を遣はせて置く中にやア夫よくれ功能は文章を書
くとか口で言ふとか顯はれるに違ひなしと斯う大雑平に
言たならば。べら棒めい三千万人の中から勝手次第な事と
いふやつを受け込て飯と食はした時にやア押附くものか
と思ふだらうが。中々左に非老人何ぼ何でも取得のない奴
が無着茶に飛び出した例はなし只文久丈けの直打と自ら
青銭どか天保どか思ふ迄の事方無し種無しの法界坊が大
僧正の位を望む事はなし趙の平原君魏の信梁君齊の孟嘗
君楚の春申君何れも三千の食客と置たといふが。一々試

をして居候とさした譯でもなうらうが數限りもなく我も
われもど跡が支えて賣切れ申候の何のといふ程にやア來
た話しも聞かず大体法圖の有たもの。そこらに心配の決し
ていらぬ事夫と誰から頼み込む夫から申入るといふ時に
の面倒臭いからマアよしにま様と思ふものが多くある其
世話をする方でも一寸逢た時に否な野郎だと思ふ時今
川義元が山本勘助と見損ひ呉の孫權が龐統と失ひ項羽が
韓信と手に入れぬい様なもので見損ひ聞違ひ蟲の好かね
い風が有るから一人の眼で一人を見つめた時にやア飛だ積り
違ひをするから周旋人を以て身の上を定める習ひの世の
爲め國の爲めに大害と引き起す基ひ社稷の爲めに利益を
爲すのに此招賢法を立るに如くいなし去りあが人

骨音真記 十一

試して用ふるのに學問が有る文章が書る詩を作る口前
が宜と夫計りを以て證據に取る譯にやア行かねいから理
論の立てても十分に書く事の出來ぬものに書記が附て
ゐて其了簡方見込の筋と言ひして書取る様にするのが肝
心といふの只狂言や踊をするのとの違て實功が立ち物
の爲めに眞用をなすのを專一とするから必きしも虚飾計
と貴ぶべからずとの云もの、文質彬々然たる内外抜目の
ないの尤も宜い人なれ共只上邊の輕薄風にエマカされ
ざる様こそ此仕方に於て注意すべき所なりと一通りの所
の迂遠な様でも若し實地に行て見たあらバ餘程新發明の
人才登庸必ず世の爲めに古今無類の鴻益を起すべしなれ
共是が爲めに食ひ潰しの入用金がなかく大變事だど

思ふぞらうが道人民の上に立て國家の大益を起す志願の
人物だから方圖もない錢の遣ひ方なし若し殊の外のふ
品行として其處を放逐された日にやア一生涯孫末代の名
折れ菩提所の物と竊み施し物の先きを切ると同ト事心有
るもの頼まれても無法の事を爲る氣遣ひなし只不用不急
の格別な物入りを除くの外當り前の賄ひ方に附ての散財
の國の爲め天下の爲めに必ず百千倍の利益有る事聊疑ひ
有るべからずと申上げる處か實か御試し有て御覽トろ

明治十一年十月三日 出版御届

○一冊定價金五錢○十冊前金四十五錢○二十冊前金八十四錢但遠國遞送ハ此外
ニ郵便稅申受候且又前金相切ノ候共送致差留ノ御沙汰無キ時ハ引續差上可申候
弊堂住居の儀五番改正六番地と相成候間以來は六番地

東 京 府 外 大 取 次 所

西京新	京極	太田權七
大坂堂	島靜雲堂	
甲府常	磐町中山祿	島
橫濱辨	天通中屋銀次郎	
静岡江	川町杉本平七	
岡山縣	西大寺町安部勝忠	
長崎酒	屋町安中與兵衛	
神戶長	狹通日弘堂	
尾州名	古屋大會根松屋平兵衛	
加州金	澤尾張町雲根堂	
陸中盛	岡紙町澤田正助	
姫路田	原町伊藤和七郎	
淡路國	洲本坂本忠平	

函館上	大工町修文堂
石川縣	博勞町永島新太郎
西京東	洞院友田勘七
神戶北	長狹通弘禮舍
野州椽	木萬町菅谷甚平
相州小	田原綠町石壽堂
東京府	芝田町八丁目芳文堂
大賣所	人形町通元大坂町法木德兵衛
	虎ノ門琴平町靜霞堂
東京錦	町壹丁目六番地
著述兼	出版人 總生寬
假同局	竹天堂

定稅遞送免許

總生實編 編輯

滑稽演說會

第三十卷

明治十二年十月二十日發兌

竹天堂

藤田組價札の大演說

目録

毎月五日二十日發兌

東	府	外	大	取	次	所
西京新築 太田健七	大坂 豊島 藤田 菅	甲府常磐 山縣 藤田	横濱 大井 中屋銀次郎	静岡 江川 杉本平七	岡山 山口 安部勝忠	長崎 諸屋 安中實兵衛
河館上大工 修文堂	石川縣 藤田 永島新太郎	西京東御院 友部勘七	神戶 北長 藤田 高吉	野洲 椽本 高橋 衣笠 甚平	相州 小田 藤田 石 尚 堂	芝田 八丁 日 芳 交 堂
						東京 大形 田 池 元 大 坂 府 堂
						大實 虎ノ門 琴 平 商 堂
						東京 錦町 盛 日 大 濱 地 堂
						著 譯 齋 田 版 入 堂
						假 同 局 堂
						竹 天 堂

寛生

○藤田組 演説會第三十卷

大坂町々で評判の

長州 蓮田惣太

此間大坂町々で評判の高低色事此邊り

のれぬ事一人娘と子飼ひの丁稚まめて

ろり節の即ち祭文句説き上下に致して

ふも高聲町々の物騒がしき大晦日質見世

て最期の夢合せをまたのにお染久松妹脊

大坂でも高麗橋賣丁目壹番地に名高き

と賣り出すや否藤田一件に關係した事

出すべからすと京大坂の兩府より翻差し

さし向ひの心中口説きと違て頂分が

一の兩人なりしが九月十五日迄に堺の南宗寺

へ拘引にな

つた手代共六人追々召捕に及だ人数の本月十五日迄に十
 二三人警衛甚だ嚴重にして蟻の這ひ出る處もない生顔と
 死顔の相がらが變るなと、身代の贖首なら寺子屋の松王
 がせりふ贖札ぶか贖役だか何だか彼だか拘留されてゐる
 者の姓名と聴く事さへならあいと云から其御調べの様子
 の一向分るべき様なし去ばとて我輩新聞記者オットド
 ツコイ言ひ損つた演説者などと言ひ、高慢臭い固り滑稽
 と以て一世に鳴るでねい一升買ひの米と食て鼻の下の
 乾揚らない算段の職分にやアさうだとか斯うだとか其事
 柄の穿鑿をして其論説を又何とか言ひ立てねい芝やア相
 ならずと言て種の無い品玉の遣へねいから何事を差置て
 も其探訪とせずんば有る可らず是れ一つに政府の爲め

二ツに世間の人の安心の爲め三ツに我商買の種と思
 ひ立たたから直様大坂表へ出張して事の子細を尋ねんと損
 料滯團を質に置き借り店の疊建具を二重典賣に食ひせ込
 み朋友の錢と借り日あしの金月賦の証文近所引張り七處
 借り一時借り手當り放題縦横無盡腕の續く丈け虚の附る
 程口調練を用ひオベンチャラと遣ひ路用の算段豫め整ひ
 まかば相摸の國の住人堅に振る先生を登庸えたる我權的
 に泣き別れの旅立古歌に擬へてこト附ふ狂歌が難波津に
 行や此度藤田金手間と取ら老に捜す此旅と詠で見せると
 權的の權的丈けの嫉妬雜りのいやみあ都下一遠く離れて
 ゐる身の苦勞わしが好く人他も好く上方女の優いのか
 前が人見知りとまなの方と來てゐるから離して遣るの相

寄附金見聞 第三十號

談に調印の出来ぬいと聞くより竹天子眼をむき出しヤ
 ア未錬あり權的不覺あり權印巡査の強盜の爲めに疵と負
 ひ娼妓の是非一遍瘡をかき検査の醫者の眼に諸の不淨と
 見兎の賣買を事とせる者涎とビリに損毛をせざるを得
 新聞記者は禁獄罪金の恐れに勿論探訪の爲めに辛苦する
 の獨り今日に始りたるに非ず福地先生の西南の戦地に足
 と踏み込み成島大人の大坂迄行て評判と聞き犬飼某の彈
 丸雨飛の中に矢立を腰にさして奔走せり且上野御臨幸の
 時に頼んだものも無いのに東京府民の惣代だの委員ぶ
 のと稱して数日の骨折りをせし如く人の疝氣と頭痛に病
 む様でも商買の爲めに取ての各止む事を得ざる名聞譽れ
 なれば無い錢を遣ふも身体と勞するも家内のものに心配

をさせるも誠に是非なき次第又女が我に惚れるの今に始
 つた事にあらず上の華族の奥方より下乳母女中田舎行き
 の茶屋女子守り餓鬼に至る迄数多き事なれば惚れさやつ
 らの不便だけれどさうの身体が續かないと昔の都より一に
 いふ如く言ひ據あいな近所近邊生れ故郷當時住居の東京
 女の事でもさへ其通りまして上方三界京大坂通り一遍の女
 あせの事ハ譬ひこがれて死ぬれば逆千本櫻のお里が文句
 老やアねいが色の道に於て凡夫を離れた免許取り雲井
 に近き今業平京阪の地へ着致しさあらば早速府廳へ願ひ
 出て其地の婦人無体の懸幕すべからずと町中へ觸書さを
 廻して貰ひ若し惚れてく惚れ返いて一命にも拘る程
 のものハ先正味の金で差し出させ其代りとして只一言の

聲位の掛けて成佛させる引導代り抑此度の出立に於るや
 我本職の探訪に一心を凝すが故に婦人の筋なごの固り眼
 に掛る事に非ず縁切り覆を根抜きに倒し惚れたやつらを
 横なぐりと都下一を表看板の男小町不運にして強姦等を
 除くの外得心の色事の決して心配有るべからず我遠く離
 れてゐると雖も其方と思ふの情の片時絶る時有るべから
 す我今白香山の長恨歌に倣ひ其句中の下の三字と用ひて
 寵權の意と言はん併せて世の長壽家に示さんどす我之と
 唱ひて別離の杯と擧ん汝之が口三味線を引て宜く賑かす
 べし是に於て斜に構えて奴鳴り出して曰く髯公好淫重傾
 國掛口閨安求不得裏店熊娘初長成近取且那人未識といふ
 のを始めとして八九百字の長篇を作たが是の友人服部子

の望によつて東京新誌へ譲りましたから爰へ出さず
 と雖も別に都下一の文句を以て汝と我とれ情の淺からざ
 るをいふべしといひバ權君曰く詩文章の如前の持前だが
 細棹の方の私に任しておきなさいと吟り出した心意氣の
 わたえや鐘おまへの鐘木突て突れてゴンドなると團く珍
 聞の投書家がいふ様な事をいくら歌てゐても際限が無い
 かり氣を取り直し突立上り何れもさらばと言ひ捨て思ひ
 切たる忍の緒行方知れずなりにけりでの尼が崎比重次郎
 女房共いて來るぞへコレ侍たえやんせ髪がきつら亂れて
 有るぞへお前もマアそんな髪して行かまやんした事は無
 いがいつその事何もかもさつぱりと言て聞かして下さん
 せぬか言ひどの何をお前の心の十夫れ縫れ髪どの稻川が

髪梳きの掛り文句の是や此往くも還るも別れて知るも
 知らぬも逢ふ坂の山隠くす霞ぞゆのしどの勸進帳市川團
 洲が得手物風蕭々兮易水寒壯士一去兮不復還どの荆柯が
 慷慨悲歌懐に匕首を貯ひて置くなどの用心にやア及ね
 い文明開化の今日道中指しの長物の勿論無用の品の持参
 せず種取り帳一冊を腰に下げ柳原の土手見世に於て買ひ
 込たる上下残らず沓の帽子まで揃て代金壹圓五十錢蝠
 蝠傘の柄の毀れと直にメテッキにしたる竹の曲た握りは
 皮が黒く焼けて見え手に提げたるカバンは出来合の安物
 に金巾の切れと張り附けたる代物なれば一雨の夕立に逢
 ひば忽ち化けの皮剥けて張り抜き紙真を顯すべく我店
 請けの八五郎と差配人に跡の始末留主中の心附けを頼ま

置き最早此世に望まざしやアねい心掛りの無い事とし
 て神田の八町堀欄面や彌次喜太がゐた所と同区内錦町の
 裏店と出て大通りへ顔と出すと早新造年増に權妻鬻幾千
 百の別品を見て我が鼻の下の日本橋を過ぎ同ト東京の内
 でも芝口から先さの一方に海を詠め一方に山を見て蒸氣
 の烟りと共に針路を南に向けつゝ所變れば品川の宿に掛
 り頓て越来る川崎や早程が谷の程もあくから先きの都路
 往來に讓て木錢宿の泊りく石部の宿でお半と假寐の夢を
 結だ長衛門の役徳いなくて五十三次の道中をするの詰
 らねいと下等の蒸氣東京丸へ乗り込んでいくらか入る
 から鞍馬山へ郵便を出して羽團扇を借り寄せ自ら竹天坊
 と名乗り巻烟草の烟りに乗て貳百餘里を一足飛び大坂天

滿の真中へぞんと下りて彼方此方と見廻す處にある繪草
 紙屋の見世先に藤田傳三郎一代記と云ものを見附けたり
 是こそ究竟の品物を手に入れたり大願成就コ、チロヤと
 其巻を開て見れば書たりや書たり夫れ藤田傳三郎の由緒
 因縁を尋るに長門國阿武郡南片側町と云處の生れにして
 久しく民間に落果たりと雖も其先祖の足利の時管領山名
 宗全の末の子山名成定にて足利家の末に至り毛利元就と
 陶晴賢と嚴島に戦ひし時晴賢に隨ひて敗れ其後の多喜之
 助といふ者より代り此片側町に在て農民とありしが元藤
 原姓あるを以て藤田と改めしが十一代を経て貳百八十餘
 年の後天保十二年丑の六月十二日傳三郎出生せり其父の
 半衛門と云て酒釀を業となし居たりしが五人の男の子あり

りて其四男が傳三郎にて性質伶俐く都ての行事兄弟に勝
 るが故に父の愛深く元武門の家なれば武藝學問をさせて
 其家を興さんと思ひ夫くの師に就て學ばせけるに物覺え
 の善き事一を聞て十を知るの才有るゆえ猶勉強怠らむ有
 りて十七歳に成ける時父亡り總領の某の先づ年没し二男
 鹿太郎なるもの家を續ぎしが大膽ある傳三郎の我農商の
 業と嫌ひ頗る驕慢ありしかば兄や親類の者之が異見を加
 ふれば却て罵り笑ひ兎や虎の力を疑ふ田夫野人が豊太閤
 那破翁あるを知らんやと飽まで大言を吐き散らしいよく
 放蕩を極めければ兄鹿太郎大に怒り汝の如何なる惡魔に
 魅られて斯る心になりたるや終にの疊の上にて果る事
 能はざる奴なり今日より勘當する間何方へなり共勝手次

第に出て行くべしと言われければ山口の城下に到り兼て
馴染の興膳隼人に對面を乞ひしに隼人の傳三郎が器量を
喜び大に珍重し居たる處に赤馬關に於て外國船を砲撃の
事あり又元治元年七月下旬毛利の重臣福原越後兵士を引
き連れ伏見に入り巽に嫌疑を受し人の官職を復し且つ讒
言の爲に朝參を差留められたる主人宰相父子の事を強願
に及びければ朝廷に於て越前因幡の兩藩に命トて説諭
の間時日の後れしかば長將益田國司の兩人又兵を引て伏
見天王山に陣取り終に會津薩摩の強兵と戦ひ残り少に打
ちなされて毛利の將數十人天王山に自殺の時藤田傳三郎
の小荷駄の役ありしが右の足に鉄砲を受け歩行自由なら
ざるを氣と願まして大坂迄退き隼人が手に扶けられて船

に打ち乗り國元へ逃れ歸り治療を加えしに一月計りにし
て疵の全く愈えさり毛利父子の寺院に幽居して朝廷へ謝
罪なし重臣十三人を誅しけるに長藩の名士高杉晋作の俗
論黨と惡き萩城に迫りて三日の間戦ひ俗黨の謀主數人と
殺して一藩の方向を定めたり此時傳三郎の隼人と共に晋
作に附て戦功を樹てたれ共恩賞の無さを憤り長州の地を
脱出して播州に足を留め世の景況を考かひつゝ、今外國人
の爲る所を見るに一大商業を開らかば武を以て州郡を争
ふ者に勝るべしと思ひ立ち去が金瘡再び破れければ攝州
有馬の温泉に滞留中元の敵方ある中野梧一といふ者は是も
傳三郎と同日の戦争に手傷を負ひて湯治中計らす兄弟同
様の交りとなしたりしが藤田は中野と別れて興膳の許へ

歸り只酒色を常として遊び歩行泥の如く酔て大道中へ寐
倒れたる處へ通り掛りしに當時山口縣令昔藤田が朋友中
野梧一なり此体を見て梧一の傳三を搖り起せしに一向に
醒めざるゆゑ見下げ果たる奴なりとて穿たる沓にて傳三
が類と蹴破りつゝ去りたる跡にて目覺めし傳三茶見世の
女より此体と聞て大に怒り梧一が跡を追ひ附きて恨みを
いふかと思ひの外互に顔を見合して何か心に點頭つゝ分
れ行く其跡に傳三の平生の飲仲間徳島某の許に到りしに
其人の添書を以て横濱の大商人山城屋和助の方へ行き手
代となりてある内陸軍の御用足しをして主人和助三十万
圓の損毛あり如何せんと思感せしを傳三郎が周旋にて此
金を調ひたる手柄よりして大坂表に大商店を開くに至る

元の起りの梧一が朋友の情を以て人知れず傳三郎の志を
遂げさする世話とせしゆゑなりとかや夫ら今日に至る
迄の事を擧げたる物の世に有り觸れたる傳起だからあんな
まり長く書くのも天下第一古今無類絶世の珍文笑ひの本
尊滑稽の本来元たる筆先玄やアねいから世人の未だ夢
にも知らざる傳三が實録藤田家の來歴と穿鑿するに先祖
の大職冠鎌足藤原の家元中興の祖の和藤内にして虎を這
ぬ毛唐人を驚かしたる豪傑より第百五十五世の後遠藤
此者盛遠といふ渡るの妻袈裟御前に戀慕して文覺上人と
改名し紀州の高尾寺に住職中出入の洗濯女を孕まして出
來たる子が加藤左衛門重氏父の血筋と引て妾の色に迷ひ
本妻の嫉妬甚きを離別せんと思ひども石動といふ子の

有る中女房の里親鷲塚金藤次秀國といふ玉藻前の淨瑠璃
 にある大將に濟まないから我身を引いて高野山へ上たの
 蛙の子が蛙にゐる瓜の蔓へ茄子のならない道理の争の
 ねい物其忠僕藤八と二門の兩人石動丸を守り立て成長の
 後後藤基次と名乗て始めの黒田家の老職終に大坂に籠
 城した名代の又兵衛打死の跡と吊たの御城へ御出入町
 人の藤屋伊左衛門七百貫目の負債の爲めに勘當されて紙
 子を着たとある夕霧の間夫だが菅原の進藤玄番の首實
 の赤面役佐藤舜海先生の湯島に病院を開き江藤新平の國
 事犯をして首をチヨン切られ近藤登之助の旗本組の荒破
 もの藤堂高虎の源助より三十五万石に經上り伊賀の上野
 に又五郎と志津摩の敵打など、いつたならば何をいふの

だか分らなくなつて仕舞ふが右藤の字の附た人の皆此傳
 三郎が掛り合ひ若し存生で居たならば其時きや拘引夫れ
 頼むと梅枝の手水鉢を見た様に敲いたら贖金の手掛りが
 出るだらうと何れ逃れぬい仲間同士との位有るか未だ
 儲にや知れぬいが三百万圓餘の金と全く世間の風聞の如
 く先年我國より獨乙の製造所へ頼んだ時同國へ派出した
 某が紙幣價造器械を買ひ入れて製造した其時わ我國から
 一億七千方の注文の刷毛序だといふが其製造を頼んだ處
 の即ちフランクホルト・ルドントルフ(商會にて固より大
 切なる紙幣の事なれば嚴密の約束をか互にして贖物な
 が有る時の早速日本政府へ密告すべしと文あり且其時
 に日本から行てゐたもの官員と書生許りで金力の有る

者いなし又三百萬圓の紙幣の中々大荷物なれば内証で我
國へ持ち込む様な事い出来まト又藤田等が算段で西南事
件の時會計部の備金三百萬圓と引き換へふといふが
其事件の一年の二月に始まり三月四月の最も會計の混
雑な時で三四月頃會計部から拂ひ出した紙幣の大抵國
債局の準備金では舊紙幣の太政官札や廣島山口福岡長
崎の諸縣から取立てにあつた租税金で大藏省から一時に
會計部に廻りされた事やアねいよしや廻したにもせよ
夫程の大金なれば三井銀行か其他の銀行へ預けられた筈
あれバ贖物を引換える氣遣ひもなく尤政府で二圓十圓の
新紙幣を増發した事があるが夫の七月以後の事で五月以
後の第十五國立銀行から借り入れられた征討費金千五百

萬圓もあり會計部の順序も大に定つたからそんな氣遣ひ
もあるべからず又深く之を考るに四百倍の顯微鏡で漸く
蜻蛉の足壹本足らざるを見る位の善く出来た贖札なれば
明治十年新紙幣の出るのを待つに及ばす其前から遣ふべ
き筈あり是等を以て推し置れば此度藤田等が事の紙幣贖
造の事と急度定た譯でいながらうと例の日報記者が愛國
愛政府の深切論日本一は思臣賢良新聞社中の勿論諸官員
様方の中にも又といひ有るまトさ程の御用看板を掛けた日
々新聞の論説あれバも間違た事い有るまトく世間に流
傳する所の話の三百萬圓も嘘獨乙で器械と買たのも嘘政
府の金と引換えたのも嘘藤田中野が縛られたのも嘘川路
大警視様の死去も嘘岩倉さんや内務卿が大坂へ出張にな

るのも嘘今月十月なのも嘘來月十一月なのも嘘(舊曆)にすれ(琉球)の一條で支那の談判も西郷隆盛の死だのも嘘(其當座)愚人の(話)尾上多美藏の年寄あのも嘘世の中(の事)大抵嘘なるべし大法螺に極りたりと我輩竹天堂主の断定し得たり嗚呼世間嘘の流行するや何ぞ斯の如く甚だしき(噓)札固より嘘なり嘘の猶更嘘なり實に非るなり然り而して嘘との獨り(噓)札の(噓)のみならず其物に非ず其價無くして其本物の假聲と遣ひ其本物の姿態に(異)似て其本物丈(の直打)を附けて其價を取事(の皆)噓物なり夫れ(噓)せ物の世に多き西郷隆盛江藤前原の類が維新の始めに(ド)ン(コ)ドンと押し出して幕府を斃し東北を鎮めて千載(恭)靡の帝業を恢復さしよの(立)派ありと雖も終に朝敵とあり

て誅戮されたの(即ち)勤王の(噓)せ物あり琉球藩とあつて(我)國の(全)く(附)屬にあつた時に黙て居て今(沖)繩(縣)となつたに(附)て(支)那へ(歎)願だの(苦)情だのと(エ)ッ(ツ)の(服)從の(噓)せ物あり襟に勳章を掛け身に(顯)職と(脊)負ひ(顔)に(髭)を(蓄)ひ(口)に(世)界の(豪)傑と(稱)するも(一)能(る)く(一)藝(なく)其(權)妻(の)役(者)と(衰)通(する)の(を)知(ら)ず(替)り(目)毎(に)小(遣)金(と)持(た)し(て)出(し)其(妻)君(が)出(入)の(町)人(抱)え(の)別(當)と(宜)い(中)に(な)つ(て)る(の)に(氣)が(附)か(さ)る(の)賢(明)の(噓)せ物(な)り(且)つ(地)芋(を)以(ち)て(川)越(と)な(し)天(鉄)羅(と)以(ち)て(金)銀(と)な(し)シ(ヤ)ツ(パ)ン(出)來(と)以(ち)て(舶)來(と)な(し)西(洋)手(品)の(首)切(り)占(者)の(失)物(判)斷(按)摩(醫)者(の)藥(配)劑(綠)日(の)植(木)根(なし)形(なし)の(エ)マ(シ)物(の)數(を)擧(げ)る(に)違(わ)ら(ず)夫(れ)淨(説)と(稱)し(講)談(と)唱(へ)て(世)人(の)心(を)騒(立)

るのの憂國者の實世物なり經濟と云ひ法律と云ひ修身と云ひ窮理と云ひ文明と云ひ開化と云ひ際と云ひ貿易と云ひ世の爲めと云ひ人の利益と云ひ何と云ひ彼と云ひ口前立派でも其肺肝を開て見れば世の爲でも人の爲でもなく只己が口と肥し我身を利せんとするの一點に出で其云ふ所と思ふ所との藤田が贖物の蜻蜓の足一本不足だの餘たの段々やアねい四百倍の顯微鏡所の其裏口へ廻て見れば何様への手續誰殿への申入何省への電信何官への周旋と取入りの算段食ひ附きの工夫或の縁邊を以てし或の同國の好とを以てし或の學問上の才能を以てし或の論辨交際口の利屈を以てし或の追從輕薄の取り卷きを以てし或の金融の恩義と以てし或の植半八百松の料理を以てし

或の今春柳橋の附き合を以てし或の洋行と看板に掛け或の會社を結び講中を拵へ連名と署し徒黨を聚め最負引張り類を呼び友を誘ひ表向の公平ぶの公論だの民權だの壓制だの束縛だの同權だのと尤らしい名を附けても追々其跡あら内幕の眞鍮を顯らせ西郷の反逆に内通廣澤の暗殺に一味氣老坂の暴殺に關係此度の一件に連累と忠臣と見え豪傑と聞え英雄と名乗り才子と言ひれ賢明と稱せられた人物大抵の罪惡貫盈天地に容れざる大贖物たる世間未だ覺らざるもの甚だ多し贖物も亦盛なる哉警視廳も亦忙い哉

明治十一年十月三日

出版御届

○一册定價金五錢○十册前金四十五錢○二十册前金八十四錢但遠國遞送ハ此外
ニ郵便税申受候且又金相切ノ候共送致者留ノ御沙汰無キハ引續差上可申候
弊堂住居の儀五番改正六番地と相成候間以來は六番地

東 京 府 外 大 取 次 所

淡路國洲本	坂下忠平	姫路田原町	伊藤和七郎	陸中盛岡紙町	澤田正助	加州金澤尾張町	雲根堂	尾州名古屋大會根	松屋平兵衛	神戶長狹通	日弘堂	長崎酒屋町	安中興兵衛	岡山縣西大寺町	安部勝忠	靜岡江川町	杉本平七	橫濱辨天通り	上屋銀次郎	甲府常磐町	平山祿郎	大坂堂島	靜雲堂	西京新京極	太田權七
-------	------	-------	-------	--------	------	---------	-----	----------	-------	-------	-----	-------	-------	---------	------	-------	------	--------	-------	-------	------	------	-----	-------	------

假	同局	著述兼出版人	東京錦町壹丁目六番地	總	生	寬	竹	天	堂	東京府下	大坂町	大黒屋金之助	神保町	石壽堂	相州小田原綠町	菅谷甚平	野州椽木萬町	弘讀舍	神戶北長狹通	勘與舍栗田	水戸下市根積町	永島新太郎	川縣博勞	函館上大工町	修文堂
---	----	--------	------------	---	---	---	---	---	---	------	-----	--------	-----	-----	---------	------	--------	-----	--------	-------	---------	-------	------	--------	-----



